

ドラゴンクエストVIII 呪われし姫君と混血のジェミニ

レイ 1020

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドラクエⅧの主人公に双子の妹がいたらと言う話です。オリ主は主人公とは違ってサザンビークで育ち、次期女王となる立場にありません。そんな彼女が主人公パーティーと共に世界を回る……そんな話です。

目次

プロローグ	
恐れられし王女	1
旅路へ	6
親としての想い	11
トロデーンの悲劇	19
新たなる旅	23
トラペッタ編	
トラペッタへ	28
ユリマの願い	35
滝の洞窟へ	42
滝の洞窟と主	47
対決！ザバン	53
ユリマの想い、そしてドルマゲスの行方	58
リーザス村編	
リーザス村へ	65
思わぬ再会	71
あの日の真実	76
譲れない想いと決意	85
港町ポルトリンク	93
対決！オセアーノン！	97
船旅	103

プロローグ 恐れられし王女

私は恐れられていた。．．．．．主に一部の王族達からだが、あまり良い気はしていなかった。恐れられていると言うのは様々で、異常な魔力の持ち主だとか、今後の国間での対立を及ぼす根源だとか、その他諸々いろいろ有すぎて覚えてきれなかった。でも、特に私の耳に引つかかったのは．．．．．。

『システイア・サザンビークは、竜神族と人間の間で生まれた混血児』

そう、これだ。どうにも私はれつきとした人間の血を引いてるのではなく、“竜神族”と言う人間とはあまり関係をあまり持たずこの世界とは違い異世界で暮らしている人たちの血も混ざっているらしい。叔父様であるクラビウスの話によると、どうやら兄であるエルトニオ．．．．．つまり私のお父様が竜神族であるお母様．．．．．ウイニアと恋に落ち、その時に生まれたのが私なのだという。

『義姉上はお主らを生んだ途端に息を引き取ったのだ。竜神族の里でも育てられることを許されなかったお主らは、人間界で暮らすこととされたのだ』

『そうなんだ？．．．．．あれ？お主ら？私の他にも子供が産まれたの？』

話を聞いていた時、まだ幼かった私はそのことがずっと気になっていた。産まれていたのは自分だけではなかったのかと言うことに。

『ああ．．．．．システイア、お前の双子の兄と呼べる者だ。本来

であれば共に暮らせるはずであったのだが、どうにも竜神族の王がそれをよく思わなかったらしく、その兄は王の力によってお主とは違う場所へと送られてしまったのだ……』

『ふくん？私、お兄ちゃんに会ってみたいけどな〜？』

『ふっ……お主が望むのであれば、いずれは会えるであろう。今はお主は兄に会ったときに恥をかかぬよう、勉に励むが良い』

『むくく、叔父様はそればかり！少しは私と遊んでよ！』

『はっはっはー！うむ……時間があればそうしよう……』

『やったー！』

あの頃は本当に楽しかった……つと話が逸れたね。ともかく私にはこの世界のどこかに双子の兄がいて、別の場所で暮らしている。その時の私はいつか絶対にお兄ちゃんに会いに行こうって思ってたんだけど、その考えは甘かった。

自己紹介してなかったけど、私はシスティア・サザンビーク。サザンビーク王国の第一王女だ。サザンビーク王国は世界でも一位二位を争うほどの大国で政治でも最も発言力がある国とされていた。そんな大国の国王をしている叔父様には驚きしかないんだけど、私にはそんなこと言っていられなかった。だって……。

『私の跡を継ぐのは……システィアである』

こんな爆弾発言を叔父様にされちゃったからね……。てつきり私は叔父様の子供で私の従弟にあたるチャゴスに継がせるんじゃないかって思ってたけど、私の予想は大きく外れた。だけど、そ

の叔父様の発言に周囲にいた兵や家臣、大臣達は誰一人として反論する人はいなく、むしろそれは称賛する人までいたほどだった。……まあ確かにチャゴスはちよつと……あれだけどさ？そんなわけ、後継者になった私はいろいろと忙しくなることが確定し、兄を探すどころではなくなつてしまったわけだ。

結局そのまま話は進み、私は王を継承するための儀式“王家の試練”を受けることとなり、まだ齢7歳の私はその日から騎士さんから剣の稽古を、魔法師さんから魔法の稽古をさせられることとなった。

その時からだった。私が恐れ始められたのは……。

『なんて見のこなし……そして剣捌き……動きに無駄が無い……このお方は……』

『これほどまでに大きな魔力……私にはとても……ステイア様のお力は……』

二人の師からは明らかに師とは思えない畏怖の視線が向けられていた。それは、警護していた数人の兵士たちや大臣達もそうだった。

『……え？なんで？私、何か変なことした？』

この時の私は知りもしなかった。まさか私が何度も使っていた剣技が子供である私には絶対に使いこなせない【ギガスラッシュ】だったと言うことと、何発も連発して撃っていた、7歳の魔力では絶対に使えない【メラゾーマ】だったと言うことに……。

うん、これは恐れられるよね当然。それからと言うものの、先生達は私に対してどこかソワソワしながら教えるようになり、どこか他人行儀な態度で接してきたため、幼かった私は我慢しきれずに怒ったん

だ。

『なんでそんなに怖がってるの!? 先生達は私の先生でしょ!? もっと前みたいに優しく教えてよーもっといろいろなこと教えてよー!』

後から思ったけど、それは言わなかった方が良かったかもしれない。．．．．．なぜなら、その後私は“聞きたく無い言葉”を聞いてしまったから。

『殿下．．．．．恐れながらわたくしどもにできることなど何もありませんぬ．．．．．あなたのその力は．．．．．異常な故に．．．．．』

『!!』

『同感です。あなた様はその年齢とは似つかわしく無いほどの実力を身に付けてしまわれた。もはや私たちが教えられる領域では無いお立場に．．．．．』

『そんな．．．．．』

先生達の皮肉とも取れるその発言に私は深く傷ついた。よく見てみると、二人は肩を震わせながら私のことを見据えていた。まるで．．．．．魔物を目の前に対峙しているかのように．．．．．。

『申し訳ごぎいませぬ殿下。．．．．．わたくしどもは今日をもってあなた様の教育の任を降りさせてもらいます。あなた様であれば、必ず王家の試練を突破できるでしょう．．．．．』

『私どもも、応援しております故．．．．．どうか、お元気で．．．．．』

そう言い残し、二人は去っていき、私は思った。

『私っておかしいんだね……そりやそうか。こんな小さな私が先生達を超えちゃったら怖がつちやうよね……はは』

戒めながらにポツリと一言をこぼすと、次にこぼれ落ちたのは……一雫の涙だった……。

旅路へ

時は今へ。現在の私は18歳になり、着々と王位継承へと近づいていた。継承は20歳になったらと聞かされているが、ぶつちやけて言うなら、今王位を継いだとしても問題はないように思えた。今の私は18歳ながらも政務をこなしたり、国間での行事にも参加したり、国のことを任されていることが多かったからだ。女王陛下になるために今のうちに慣れておくべきと言う叔父様の意見だけど、意外と問題なくこなせていた。

これなら、問題なく王位を継ぐことができる………だけどその前に、私にはやっておきたいことがあった。それを今、叔父様に伝えにきているところだった。

「世界を………回ってみたい？しかも………一人で？」

「はいー！」

伝えた内容に、叔父様は難しい顔をした。当然か………私は次期女王になる人だ。そんな大事な人が急に一人で世界を回ってみたいなどと言えばそれはそうなる。横にいる大臣も同じくだった。

「だめだ。お主は自分の立場というものを考えるべきだ………」

「わかっています。ですが、これは昔から決めていたことなのです。王位を継ぐ前に一度、世界を自分の目で見てみたいって。”王になる者、世界を知らずしてなり得る者では無い！”そう叔父上は以前おっしゃいましたよね？ですのでこの機会を糧に私は王として成長してこようと思うのです………どうしてもダメでしょうか？」

「・・・・・・・・」

叔父様はいまだに難しい顔のままだった。叔父様にとって私は家族。叔母様はすでに亡くなられ、お父様も亡くなられてるため、実質もう叔父様に家族と呼べる人は私とチャゴスしかいないんだ。そんな大事な家族を一人で送らせるというのはどうしても心配しちゃうよね・・・・・・・・。

「心配には及びません。決して危ないことをしに行くわけではありませんので。それに、叔父様は私の実力を知っていますよね？それでもまだ？」

「わかっている・・・・・・・・痛いほどにな・・・・・・・・」

さつきまでの難しい顔は消え去り、代わりに悲しげな顔をした叔父様。“あの時”のことは当然叔父様の耳にも入り、意気消沈した様子で自室に入っていた私を心配して政務を済ました後、きてくれたんだよね。当時の私は、まだ心が不安定だった為、誰でもいいからすがりたい気持ちでいっぱいだったんだ。だからこそ、部屋に入ってきた叔父様をみた途端に、涙腺が崩壊し、叔父様に抱きつくようにして泣いたんだ。

『お主のことは私が一番よく知っておる。大丈夫だ。お主がどのように思われようと、私はお主の味方であるぞ・・・・・・・・』

その言葉は今でも鮮明に思い出せる。その言葉があつたから私は崩れずに今日まで生きてこれたんだ。だけど、その時から私はあまり人前で魔法を使ったり稽古をしなくなった。前のように畏怖の視線で見られることももちろんだけど、何より気が散るっていうことがあつた為そうしたんだ。あとは・・・・・・・・そうだね。

「システイア．．．．前みたく、笑ってはくれぬのか？」

どこ悲しげにそう言う叔父様に私は首を傾げた。

「はい？私は毎度ではありませんが、叔父様には笑顔を見せているつもりですが？この前の国間での挨拶の時でも私は笑っていたでしょう？」

「そうではない．．．．今のお主は、心の底から笑えておらぬ。表面だけが笑っているにすぎぬ．．．．本当は、笑ってなどいたくないのであろう？女王になどなりたくないものであろう？」

「っ．．．．．」

的をいたその発言に私は息をのんだ。正直凶星だったからだ。確かに私はあの日からまともに笑ったことはあまりない。それに私とて、好きで政務などをやっているわけではない。国民の象徴になっっているわけではない。でも．．．．やるしかなかったんだ。だって．．．．．。

「確かにそうですね。ですが．．．．それが私の“定め”ですので、えり好みしている場合ではないのです」

「そうか．．．．．」

目を瞑りつつ、また難しい顔をしながら何かを考え始めた叔父様。そして数分後．．．．。

「わかった。システイアよ、お主のその旅．．．．許可しよう」

「え!?!ほ、本当．．．．い、いえ。それは本当ですか？」

叔父様のその答えに思わず素が出ちやった私は慌てて元に戻し、改めて尋ねた。

「真だ。だが、条件がある。適度で良いが、手紙をよこすように。くどいが、お主は次期女王となる者だ。そのようなものに何かあればたまったものではないのだ。……その条件を呑めるのであれば、許可しよう」

「……分かりました。ではその条件で私は世界を回る……それで良いですね？」

「うむ……」

ようやくだけど、叔父様は首を縦に振ってくれた。そうと決まれば早速準備しないと！そう浮き足立つ気持ちで王の間を出ようとした私だったけど、出る直前に叔父様の方を向いた。そして……。

「叔父様……ありがとう」

「!?……ふつ、久方振りだな。お主のその笑顔を見たのは……」

私は最後にそう言い残し、今度こそ王の間を出た。

旅の準備を終えた私は、再び王の間へと来ていた。旅の装いとしては、いつも来てるレースのシルクのドレスではなく、いかにも旅人と思える軽めの装いだった。腰近くまで伸ばした茶色の髪の毛は戦い

の時邪魔になるかもと思い、ポニーテールで結い上げた。これだけ見れば、私が王女だなんて誰にも思われないと………思う。

持ち物もそこまで多くはなく、ある程度の着替えと、路銀、食料、そして一振りの剣だけである。あとは旅先で調達していけばいいから大丈夫でしょ。

「忘れ物等はないな？」

「はい、問題ありません」

「殿下………どうか、お気をつけて………」

「ええ。………では、行ってきます！」

そして私は叔父様と大臣に別れを告げると、静かに出て行った。城から出たあとも、国民の人たちは私には気づかず素通りして行った。………とは言っても今の私はフードを被ってるから気付かれないのも無理ないんだけどね……。なんで被ってるかって？だって、こんな街中に次期女王になる私がいたら混乱が生じちゃうでしょ？だからかな。

そんなわけで門番の兵達にも話をつけ、私はようやくサザンビーク王国を出たのだった。

「さて………まず行くのは………やっぱりあそこかな？」

私の旅が………今始まった。

親としての想い

私には家族二人いる。いや、正確には二人しかいなくなってしまうのだ。兄上も妻も、私を残し先に逝ってしまい、残されたのは息子のチャゴスと、兄上の娘のシステイアのみだった。まだ二人は幼かったこともあって、二人の死に対してはあまり悲しみを見せていなかったように見えたが実際にどうだったかは私にもわからなかった。

とにかくその時から私は二人に寂しい思いをさせないようにと優しく接し、甘えさせた。だが、息子のチャゴスは甘やかしすぎたのか、どこかだらしないと言うか王族としてはあまり宜しくない性格へと変わってしまったのだ。父として……少し嘆かわしくなってくる。

対してシステイアはチャゴスとは真逆で、何事にも真面目に取り組み、時には甘え、時には王女らしく勉強に励んだりして己自身を鍛えていた。その姿勢、態度はまさに次期国王にふさわしいものであり、私はすぐさま継がせるのはシステイアと決めた。……それが、システイアを苦しめることになるとも知らずに……。

システイアは元々明るい子だった。どこで何をしても笑顔が絶えず、何事にもいつも楽しそうにして取り組む可愛らしい少女だったのだ。だが、私がシステイアを後継者にすると決めてから、それは崩壊への道を辿ってしまった。

『システイア！……いったいどうしたと言うのだ？』

『叔父……様？……うう……ぐすつ……
うわあああ……つ!!!』

システイアに剣と魔法を教えていた両教師達が揃って降りたと言

う話を大臣から聞かされ、私はすぐさまシステイアの部屋へと向かい、勢いよく中に入った。そこにいたのは今まで見てきた太陽のような笑顔とは対極的な、冷たく冷めたような表情で椅子に座っていたシステイアだった。……。

私が声をかけると、システイアは私の元へ駆けつけ胸に顔を埋めるようにして声を上げて泣き始めたのだ。私はあえて何も言わずに静かに背中をさすり、システイアが落ち着くのを待った。……システイアがこのように声を上げて泣くのは見たことがなかった為、私も戸惑いを隠せなかった。

『私っておかしいの……？さつきね？先生達よりも剣も魔法もできちゃって……それで先生達を怖がらせちゃったの……。ううん、先生達だけじゃない。周りにいた兵士さん達も同じような目で私のこと見てた……。ねえ叔父様？叔父様は……。私のこと……。怖い？』

いまだに瞳を揺らしながら恐る恐る聞いてくるシステイアに私は罪悪感を覚えた。……どうしてこの子にこんな思いをさせてしまったのだと。元はと言えば私がシステイアに跡を継がせるなどと言ったことが原因なのだ。別に今この時期でなくてもよかったはず。もつと二人が成長してから改めて検討することもできたはずだった……。どうやら私は……。一人の大切な家族を傷つけてしまったようだ……。ならば、私にできることはただ一つ。

『怖いわけなからう？お主は私の大切な家族なのだから……。』

『叔父様……。』

『よく聞けシステイアよ。お主のことは私が一番よく知っておる。大

丈夫だ。お主がどのように思われようと私はお主の味方である……そのことを忘れるでないぞ?』

『はい……』

私はただ、システイアの味方でいようと決めたのだ。システイアをこのように追い込んでしまったのは私の責任。だからこそその責任は私が受け持つことにした。将来、システイアがどのような目で見られ、蔑まれ、傷つけられようと、私だけはシステイアの良き理解者であり、親であろうと決めたのだ。

それから約10年、システイアもチャゴスも健やかに成長していった。システイアは私が普段からしている様な政務をこなしつつ、国間での業務にも参加しながら日々を過ごし、いつでも私の後を継げる様にと言う意思表示が現れている様に見えた。チャゴスは……あまり変わらず、よく勉強をほっぽり出してベルガラックのカジノへ遊びに出してしまうことがよくあった。息子は、王子としての自覚があるのだろうか?

それは置いておき、あの一件の後のシステイアは間違いなく変わった。以前よりもさらに勉強や稽古に励む様になり、そして……笑わなくなった。もちろん全く笑わないわけではなく、国間同士でのパーティーや私などの身内間では多少の笑みは見せている。だが、私にはどうにもその笑みが本当のシステイアの笑顔の様には見えなかった。どこか無理をしているかの様な……まるで笑いたく

もないのに笑っているかの様な……そんな笑顔に見えた。やはり、そう簡単にはあの時の傷は癒えぬか……。そんな時だった。システィアから世界を回るたびに出たいと言う提案を受けたのは。

「だめだ。お主は自分の立場というものを考えるべきだ……」

もちろん私は反対した。次期女王ということもあるが、家族を一人で外へ出すというのは不安でしかないことと言ったこともあって、どうしても私は許可することはできなかった。

「わかっています。ですが、これは昔から決めていたことなのです。王位を継ぐ前に一度、世界を自分の目で見てみたいって。”王になる者、世界を知らずしてなり得る者では無い！”そう叔父上は以前おっしゃいましたよね？ですのでこの機会を糧に私は王として成長してこようと思うのです……どうしてもダメでしょうか？」

「……」

それには私も黙るしかなかった。確かにそれは私が言い聞かせた言葉だ。だが、それはその様なことをさせるために行ったわけではないのだ。だからこそ私はそれを否定しようとした。だが……。

「ご心配には及びません。決して危ないことをしに行くわけではありませんので。それに、叔父様は私の実力を知っていますよね？それでもまだ？」

「わかっている……痛いほどにな……」

その持ちたくもない実力を持ってしまったからこそ、今のシスティアがあるのだ。途端に私は悲しくなった。目の前にいるシスティア

は小さき頃の無邪気な笑顔を見せていたシスティアとはまるで別人の様で、無表情という仮面を被った王女システィアがそこにはいたのだ。昔のシスティアは……もう戻ってこないのだろうか。

「システィア……前みたく、笑ってはくれぬのか？」

ほとんど独り言の様にそうぼやいてみたが、その声はシスティアに届いていたらしくシスティアは首を傾げながら言った。

「はい？私は毎度ではありませんが、叔父様には笑顔を見せているつもりですが？この前の国間での挨拶の時でも私は笑っていました？」

「そうではない。今のお主は、心の底から笑えておらぬ。表面だけが笑っているにすぎぬ。……本当は笑ってなどいたくないのであろう？女王になど名なりたくないものであろう？」

「っ……」

私の痛烈な言葉にシスティアは少し身動いだ。その反応を見る限り……どうやら私の推測は正しかった様だ。

「……確かにそうですね。ですが……それが私の定めですので、えり好みしている場合ではないのです」

「そうか……」

やはり、簡単に姿勢を変えてくれるはずもないらしい。なれば、この旅でシスティアに変化があることを望むしかない。心配であるのは百も承知であるが、私はシスティアが昔の様に笑って過ごし、思うがままに生きてもらいたいのだ。それが……親としてのたっ

た一つの想いだ。システイアも言った通り、今のシステイアはかなりの実力者だ。多少の魔物であれば簡単に討伐できるであろう。……よし！

「わかった。システイアよ、お主のその旅……許可しよう」

「え!?ほ、本当……いい、いえ。それは本当ですか？」

一瞬であるが、システイアの表情が驚きと喜びが混ざったかの様な状態になったのを私は見逃さなかった。すぐに元の無表情へと戻ったが、それでも先ほどの表情ができるということは、いまだにシステイアは笑顔の作り方を忘れていないと断言でき、少し微笑ましくなった。

「真だ。だが、条件がある。適度で良いが、手紙をよこすように。くどいが、お主は次期女王となる者だ。そのようなものに何かあればたまったものではないのだ。……その条件を呑めるのであれば、許可しよう」

システイアに出した条件をシステイアは少し考えながらも首を縦に振り、納得してくれた様だった。システイアは旅の準備をしてくと王の間を出ていこうとドアに手をかけた。だが、ドアが開かれる前になぜかシステイアは私の方へ顔を向けた。その向けられたシステイアの顔は……私がずっと見たいと言ってきたものだった。

「叔父様……ありがと」

「!?……ふつ、久方ぶりだな。お主のその笑顔を見たのは……」

システイアはそう言い残すと今度こそこの場を後にした。

「陛下・・・・・・・・殿下のあの顔・・・・・・・・」

「うむ・・・・・・・・久方ぶりに私のシステイアが帰ってきたかのような心地だった・・・・・・・・」

横に控えていた大臣にそう言った途端、私の瞳から一滴の涙がこぼれ落ちてくるのだった・・・・・・・・。

「本当にその装いで良いのか？お主は仮にも女王となる者。それなりの身なりというものが・・・・・・・・」

「構いません。今回の旅はあくまでお忍びで。ですから。旅の間ではシステイア・サザンビークではなく、ただのシステイアとして旅をしたいのです。ですので・・・・・・・・これで結構です」

そう言いながら服や身嗜みを整えるシステイア。その見た目からはとてもではないが王族とは思えない。まさに旅の者と言った感じで・・・・・・・・だが、それでもどこか新鮮味もあつてシステイアは気に入っている様子だった。

「では、行ってきます！」

荷物をまとめ終えたシステイアは、一振りの剣を懐に下げ、サザンビークを旅立って行った。本当であれば、私も同行したいところであるが私は国王である身。その様な自由は許されない。だから・・・・・・・・私ができることは・・・・・・・・。

「神よ・・・システイアの旅が、良きもの・・・そして変革のあるものへとなることを祈る・・・」

教会で神にシステイアのことを祈ることだけだった・・・。

トロデーンの悲劇

サザンビーク王国を出た私がまず始めに向かった先、それは……。

「久しぶりだなあ……」トロデー王国」……」

サザンビークと同等に近いほどに大きな王国、トロデー王国だった。小さな頃にしか行ったことがなかったけど、この王であるトロデ王には、小さい頃少しお世話になった覚えもあったから少し愛着が湧いているんだ。

「それにしても……」ルーラ」って本当に便利……。一瞬でついちゃうんだもんね……」

私はここまで呪文である「ルーラ」を使って来た。ルーラは一度行ったことのある場所ならばどこでも一瞬で向かうことができる移動手段としては便利な呪文だ。……とは言っても私が今行けるのはこのトロデー王国とサザンビーク王国、そしてベルガラック、辺境の村のリーザス村くらいだ。なんでベルガラックに行けるのかというと、以前にこのカジノに逃げ込んだチャゴスを連れ戻しに何度か訪れていたことがあったからだ。……もちろんカジノなんてやってない。そんなことしたら多分だけど叔父様にすごく叱られるから……。それとリーザス村は、二年ほど前にこの近くに視察として訪れていたことがあって、そのついでとしてその村に入ったことがあるからだ。

「ミーティア……元気にしてるかなあ……」

大きな城門を前にそうぼやく私。ミーティアというのはトロデ王

の娘……つまりトロデーオン王国の王女だ。小さい頃、ここに来た時に私と同じ境遇だった彼女と、少しの間だったけど遊んでいた記憶もあって今の彼女のことを気になるんだ。……もう10年近く会ってないからなあ……。それに……。

「あのチャゴスと婚約したんだもんね……。流石に心配になつてくる……。」

そう。ミーティアはあろうことかあのぐうたら……。サザンビーク王子であるチャゴスと婚約をしたんだ。叔父様から聞いた話、昔からサザンビークとトロデーオン間で1組、婚約を結ぶことが決まっているらしく今回はチャゴスとミーティアがそれに当てはまる……。私？私は……。今は置いておいて。ともかく、あのチャゴスがミーティアに迷惑をかけないか心配で仕方がないんだ。もちろんチャゴスがしっかりしてくればそれが一番なんだけど……。多分それは……。ないね。

「挨拶したいところだけど……。今〃の私の状況〃じゃ取り繕ってなんてくれないだろうしね……。残念だけど簡単に中で過ぎた後に出よう」

そう決め、私は王国内へ入った。私の状況というのはもちろんお忍びで旅途中ということだ。最初にも決めた通り、今の私はサザンビーク王国のシスティア王女ではなく、旅人のシスティアとして通している。見かけも庶民風に見せている今の私のことを王女だと話しても、信じてもらえる人など誰もいないだろう……。むしろそれがありがたいんだけどね。いつも王国内で息が詰まりそうな生活を送っていた私に訪れた、初めての自由なんだ。外でも王女なんていう肩書に縛られてたまるもんですか！そう改めて自分の状況を確認した私はトロデーオン王国内でしばらく気ままに過ごすのだった……。

「さて……………そろそろお暇しようかなあ？」

トロデーン王国に入って1日経ち、十分に休息をとれた私は、そろそろ別の場所に向かおうと宿に置いてあった荷物をまとめていた。今日はもう遅くなっていたから、出発は明日にして今日はもう寝ようとしていた……………その時だった。

「っ!? な、なにこの音!?!……………城の方から聞こえる？」

突然ものすごい轟音が響いてきて、まるで地震でも起こっているかの様に地面が揺れていた。そして次に私に襲ってきたのは……………。

「……………!!? イバラ!?!……………まずいつ……………え？」

次に襲ってきたのは巨大なイバラだった。宿の壁を破壊しながら私を丸ごと侵食するかの如く、私に迫ってきていた。だが、そのイバラは私の目の前までくると突如として力をなくしたかの様に枯れ果ててしまっていた。結果として私は無事だったわけなのだが、状況が呑み込めない私は戸惑うばかりだった。

「助かった……………の? よかった……………っ!
トロデ王! ミーティアっ!!」

自身の無事を確認できてほっとしたのも束の間、今度は同じく巻き込まれたであろうトロデ王やミーティアたちの安否に悩まされた。

「とにかく助けに行かないと！」

考えるよりも先に体が動いていた私はすぐさま宿の中を飛び出し、城の中へと向かった。だが、もう少しで城内と言ったところで私の足が止まった。なぜかと言うと、私の目の前の扉から誰かが出てくる様でその様子を見守っていたからだ。……トロゲ王たちであつて欲しい……。そう願った私だったが、出てきたのは……。

「人？魔物……。？それと……。馬？」

一人の青年と、緑色の肌をした魔物、そして綺麗なたてがみが目立つ白馬だった。

新たなる旅

「魔物っ……………」

「ま、待って！この方達は違うんだ！」

突然現れた魔物に咄嗟に鞘に手をかけた私と一緒にいた青年が慌てて止めに入った。

「どう違うと言うの？あなたが庇っているのは魔物よ？そこを退いて……………」

「本当に待って！この二人は……………」

いまだにそこを退かない青年にいい加減焦ったくなってきた私は……………。

「いい加減にして！後ろのがなんだって言うの!?!」

「このお二人はトロデ王とミーティア姫なんだ！」

「……………へ？」

……………今この人はなんて言った？後ろの魔物と馬がトロデ王とミーティア？……………いやいや、そんなわけ……………。

「……………まだ信じられぬ様じゃな。これを見てもまだ信じられぬと申すか？」

「……………それは……………」

後ろの魔物が喋り始めると、懐からなにやら取り出した。魔物が喋り出したのも驚きだったけど、それよりももっと驚く様なものをその魔物は取り出した。

「トロデーン国王の王冠……」

それは、トロデーン国王がつけるとされている王冠だった。それだけならまだ疑わしいところなんだけど、その魔物から聞こえたその声が昔私が聞いたトロデ王の声そのままだったこともあって、どうやらこの人が言っていることは真実で間違いない様だった。そうわかった私は、鞘から手を離し、臨戦態勢を解いた。

「無礼を働き、申し訳ございませんトロデ王。姿形が変わってしまった様子ですが、御息災で何よりです」

「うむ……頭を上げるが良い。始めは信じられぬのも無理ない。大目にみよう……」

この喋り方……独特の緊張感……やはりこのお方はトロデ王で間違いない。久しぶりにあったけど、元気そうでよかった。ん？待てよ？と言うことは……。

「えつと……つまりその白馬がミーティ……姫様と言うことでよろしいのですか？」

「うん……そう言うわけなんだ……。俺も初めて見たときは目を疑ったよ……」

どこ悲しそうにそう呟く青年。なんだろう？この人、どことなく私の顔と似ている気が……。まあ、今は置いておこう。改めてそ

の白馬を見てみるけど……やっぱりどこからどう見ても馬にしか見えず、ミーティアの面影はあまり見えなかった。唯一、立髪がどこか以前のミーティアの毛並みに似ているくらいで後は皆無だった。

「それよりも……お主は？ワシら以外に存命の者はおらぬと思っておったが？」

「私にもよくわかりません。気がついたときには既に周りがイバラで覆い尽くされていて……」

「そうか……お主もエイト同様、運が良かったのだな……む？お主の顔……どこかで……」

「(ギクツ)」

ま、まずい……トロデ王が私の正体に気が付きつつある……ここでバレると後々面倒なことになる。どうする……あ、そうだ！

「そ、そうか。貴方……確かエイトさんと言いましたね？この方と私の顔が似ているからですよ。だからトロデ王にも既視感が芽生えているのではないですか？」

「うむ……確かにそうであるな。お主らはどうにも似ておる。人間世界には似た顔が3人はいると言われておるが、まさにそのことじゃな」

「そういえば俺もそう思った。性別は違うけど、顔の輪郭とかそっくりだ」

とつきに行つたことだけどうやらうまく行つたみたいだ。顔が似てるとは私も思つてたことだし、特に気にしなかつた。今は今後のことを考えないと・・・・・・・・。

「その話は今は置いておいて・・・・・・・・。トロデ王、あなた方は今後どうされるおつもりですか？」

「当然我が王国をこんな目に合わせたあの魔導師、ドルマゲスを追うつもりじゃ！」

「追うと言つてもどこを探すのですか陛下？」

「わしの記憶が確かであればここから東に向かつた先に〔トラペツタ〕と呼ばれる町があるはずじゃ。そこにおけるマスター・ライラスと呼ばれる者がどうやらドルマゲスの師だつたらしくて・・・・・・・・其奴なら何か知つておるやもしれぬのじゃ」

どうやら次のいく先が決まつたみたいだ。ドルマゲスっていう魔導師がこの国をこんなめちやくちやにした張本人。トロデ王たちはそのドルマゲスを探すために旅に出るらしい・・・・・・・・なるほど。

「わしらは今すぐにも出発するが・・・・・・・・お主はどうする？」

「私は・・・・・・・・」

トロデ王が言いたいの是一緒に行くか否かと言つたところだろう。正直一緒に行く義理はないが、トロデ王にはお世話になつてるしミーティアには・・・・・・・・ある意味これからお世話をかけるかもしれないという後ろめたい気持ちが出ているし、早くお二人には元に戻つてもらいたいという気持ちが強かつた。・・・・・・・・よし！

「私もその度にご同行しましょう。私も今は世界を旅している身ですので、最後まで付き合えるかはわかりませんが出来る限りご助力しましょう」

「そうか……恩にきるぞ……して、まだ名を聞いておらんかったな。お主、名を何と言う？」

「はい。私はシ……シシリィです」

危うく本名を言いそうになった私は慌てて、偽名を伝えた。多分言ったら一発でバレちゃうだろうからね。

「シシリィじゃな。今後ともよろしく頼むぞ」

「よろしくね。俺はエイト。陛下に仕える兵士かな」

「はい。皆さん、どうかよろしくお願いします」

こうして私はトロデ王達とともにドルマゲスを探す旅に出た。これもまた世界を回るといふことだったため、一石二鳥かな？と思いついて、同行することにしたんだ。正直最後まで付き合えるかわからないけど、可能な限りお二人に尽くそう。そう心に決めた私だった。

トラペッタ編
トラペッタへ

トロデーン王国を後にした私たちは、東にある町【トラペッタ】に向かっていた。今私たちは少し休息をと近くの森で一休みをしているところだ。

「おーい！兄貴〜！姉貴〜！」

私とエイトが草株で休んでいるところに私たちを呼ぶ声が聞こえてきた。

「あの呼び方……どうにかならないの？」

「あはは……まあ慕ってくれてるわけだし、大目に見てあげようよ」

私たちをそう呼ぶ男がこちらに近づいてきた。彼の名はヤングス。ここにくる途中、なんか色々あつて仲間になつてくれた元山賊。トゲトゲ帽子を被り、いかつい顔が特徴的な人で私とエイトのことを姉貴、兄貴と呼んで慕ってくれている。その反面、トロデ王とは仲が悪く、いまだに打ち解けている様子はない。

「こんなところでいつまでも油売つてると日が暮れちまうでがすよ？アツシは早いとこ街へ行つてパーアつと飲み明かしたいとこでげす」

「うん。そうだね。じゃあそろそろいいこっか。シシリーもいいかい？」

「ええ。いきましよう」

私たちがヤングスにそう言うと、腰を上げ、トロデ王がいるところまで戻った。……そういえばさつきからミーティアの姿が見えないけど……どこに行つたんだろ？

「何度も言う様ですが、いまだに信じられねえでげす。こんないかにもおかしなおっさんが王様で、お二人がこのおっさんの家来だなんてねえ……。まつ、アツシもお二人の子分になつたわけなんで人のことなんて言えんですがね……」

「む、誰がおかしなおっさんじゃ！」

「あはは……」

「私は家来つてわけじゃないんだけど……はあく……」

このやり取りもはや見飽きた。私は二人は放っておいて、姿が見えないミーティアを探した。ここら辺の森は迷いやすいからあまり離れると危険なだけ……。

「トロデ王。姫様はどこでしょう？」

「？そういえば見当たらんのか。どこへ行つたんじゃない？」

私たちは手分けをして辺りをくまなく探してみた。だけど、そんな私たちのもとに突如として現れたのはミーティアではなく……。

「っ！魔物か！」

「む！兄貴！姉貴！」

「二人とも行くよー！」

3匹のスライムが襲いかかってきた。とは言ってもスライムはこ
こいらの魔物の中で最弱に位置する魔物。私たちにかかればそう問
題もなく討伐できる。……やはりと言うか当たり前だけど、数
分もたたないうちにスライム達を討伐することに成功した。

結局ミーティアはその後すぐに戻ってきて、出発となった。トラ
ペッタまでもうすぐだ……。

トラペッタに無事についたは良いものの、一つ問題が出た。

「なんか俺たち……妙に見られてないか？」

「ん？そうでがすかね？」

その問題がこれだった。町の人たちからどうにも視線を向けられ
ていた。それも、まるで畏怖と言うか訝しげな視線を向けているこ
とがよくわかる。まるで、私がサザンビークで向けられていた視線の
様に……つと。今はその話は無しにしよう。

「気にするだけ野暮だよ。とにかく私たちは目的を果たそう」

「そうじゃな。さて、この辺りで良いじやろ」

トロデ王はそう言いながら町の片隅で馬車を止め、荷台から降りた。

「さて、記憶が正しければこの町にマスター・ライラスという人物が住んでいるはずじゃ。ひとまずは其奴を探すことにするかのう」

「待てよおっさん！アツシらはドルマゲスとかいう道化師を追っかけてるんじゃないか？」

「もちろんその通りじゃ！わしらをこんな姿に変え、我が国をめっちゃくちゃにしおったあやつを即刻見つけ出したいところじゃ！……じゃが、今はあやつの行く先も目的も何もわからぬ故にな。ここであやつの師であるマスター・ライラスに話を聞いておけば、何やら情報を得られるやもしれぬのじゃ」

トロデ王の説明を聞き、ようやく少し納得できたヤングスは、それ以上は何も言わなかった。

「全く……せつかくサザンビーク国の王子と婚儀も決まったというに……」

「……」

そ、それは……言ってしまうとむしろ馬になって良かったんじゃないかな？あのチャゴスを相手にしたらいくら身があっても足りない気がするし……。今の状況の方がずっと楽な気がする……ミータアには不便だろうけど。

「というわけで、エイト、シシリーよ。早速じゃがライラスなる人物を探しに行ってくるがいい。わしと姫はここで休んでおるからな」

「わかりました」「お任せを……………」

そんなこんなでマスター・ライラスを探すことになった私たちは、トロデ王達と一旦別れ、街中を探し回ることにした。教会、武器屋、宿屋などをくまなく当たってみたけど有益な情報は得られず、わかっただけは最近で大火事があったことと、変な道化師が目撃されたことぐらいだった。

「ここまで探しても見つからないなんて……………」

「本当にこの街にいるのかね？」

「あつしもいい加減に疲れてきたでげすよ……………」

そろそろ日が落ちることもあつて、人もまばらになってきていた。しょうがなしに私たちは最後に酒場を訪れていた。そこにはお酒を片手に談笑をしている人たちが大勢いて、大きな賑わいを見せていた。私は酒場に來たのは初めてだけど、こんな感じなんだね……………楽しそう。

そんな中、一つの怒鳴り声が酒場内に響き渡った。

「わしの占いで先日の火事を止めたとしてもだ。そのことが次の災いの種になるかもしれんだ！」

「ルイネロさん、言っている意味がよくわからないよ。もし火事がわかっていたら少なくともマスター・ライラスは救えたんじゃないのかい？」

「……………ライラスか。あの老人とはよく喧嘩をしたものだったが……………よもや死ぬとはな……………」

近づいてみて話を盗み聞いてみたところ、どうやらあのルイネロという人はマスター・ライラスと知り合いみたいだ。でも……今、死んだって聞こえた様な? ……もつと詳しく話が聞きたかった私たちは、ルイネロさんに話を聞くべく、近づいて行った。

「あの、少しよろしいですか?」

「? ……ワシに何か用 ……む? これは ……」

「え!」

話を聞こうと話しかけたが、私たちと目が合うと突然勢いよく立ち上がり、私とエイトの顔を覗き込んできた。あまりの剣幕に私もエイトも顔を仰け反らせた。

「こ、これは ……」

「た、大変だ!! 怪物が! 怪物が町の中に入り込んで!」

「なんだとっ!」

「とにかく来てくれ! もう大騒ぎしているんだ!」

ルイネロさんが私たちに対して何か言いかけたところで突如として横槍が入った。何やら怪物がどうか言ってたけど ……嫌な予感しかしないな。

「ルイネロさん ……さっきのは一体?」

「? なんの話だったかのう? ああ、お主らの顔のことじゃな。だが残

念なことにさっきの騒ぎで気が失ってしまったわい。さっきのことは忘れて良い………」

「そうですか………わかりました」

もうこの話は終わりだと話を切るルイネロさん。正直私は少し焦った。もしかしたら私のことを何か知られたんじゃないかって思えてならなかったからだ。だから今はちよつとホツとしてる。

「兄貴達！早く怪物のどこに行きやしよう！」

「うん！今行く！シシリーも行こう！」

「わかった………」

ホツとしてる場合ではない状況なことを思い出した私は、騒ぎの元を確認するため、酒場を後にした。多分だけど………騒ぎの元は………あの人が原因だよね。そう不安になりながらも、私たちは広場へと走っていくのだった。

ユリマの願い

私たちが広場へ戻ると、そこには既にたくさんの街の人々が何かを囲む様にして立っていた。……。確かあそこはトロデ王とミーティアが待機している場所のはず。……。はあ、やっぱり騒ぎの発端はあの人か……。。

「え!?!あそこって確か!?!」

「ま、まずいですがすよ兄貴!姉貴!走るですがす!!」

「う、うん!」

「(はあ〜)」

二人もようやく自分たちの主人の危機を察したのか大慌てでその場に駆け出していった。私は内心でため息をつきながらも二人に続いた。

「な、なんじやお主らは!」

「うおっ!?!こっち向いたぞ!」 「喋った!?!」 「なんておぞましい顔なの!?!」

「な、なんじやと!?!お主ら!わしを誰だと——」

「うるさい！化物は町から出ていけ!!」

野次馬の一人の青年がそう叫ぶと同時にトロデ王に対して大量の石が投げ込まれた。投げ込まれた石が自身の顔にあたり、悶絶するトロデ王を見て、私たちは怒りを覚えたが、今はトロデ王とミーティアの救出が最優先。そう割り切った私たちは、すぐさまその間に割って入った。そしてそのまま、二人を連れ、街の外へと向かった。その際にも私たちに向けて罵声等を浴びせられ、エイトやヤンガス、トロデ王は苦い顔をしていた。私は……サザンビークで似た様なことになってたからそこまで気にはならなかった。これに慣れちゃうって少しまずい気もするけどね……。

そんな罵声が飛び交う中、私たちは無事に？町を出ることに成功するのだった。

「やれやれひどい目にあったわい……ええい！わしを誰だと思っておるのじゃ！人を見かけだけで判断しよって情けないのう。人は外見だけでは無いと言うに……」

「全く！その通りだ！」

町の外へ出ると同時にトロデ王が地団駄を踏みながらそう口をこぼす。ヤンガスに至っては自分にも似た経験があるのか、珍しくトロデ王に同調していた。……というか、普通町中に魔物がいたら誰だってあんな反応になる。正体がわかっていいるならまだしも、今

のトロデ王はもはや魔物にしか見え、町の人からしてみれば恐怖の対象にしか映らないんだ。

「……まあ今は良い。ときにエイトよ。マスター・ライラスを探し出す事は出来たかのう？」

「……残念ですが、酒場で話を聞いたところ、先日の火事のせいで既に亡くなったとの話を聞きました」

「亡くなったじゃと!? むむむむ……」

ドルマゲスに対する唯一とも呼べる情報源であるマスター・ライラスが既に他界しているとエイトから聞かされたトロデ王は、驚愕とともに落胆をし、顔をしかめてしまった。

「トロデ王、マスター・ライラスが既に亡くなっているのであれば、私たちはもうこの町に用などないのではありませんか？」

「……そうじゃな。元々わしらが追っておったのはわしと姫をこの様な醜い姿へと変えおったドルマゲスのやつじゃ! ……マスター・ライラスに話が聞ければ何やら分かるかもしれないと踏んでおったが……どうやら無駄足に終わってしまった様じゃな……」

トロデ王はそう言い終えると、すぐさま出発できる様準備を始めたため、私たちもそれに倣って準備に取り掛かった。だがそれは、一つの声によって遮られることとなった。

「お待ちください!」

突然の私たち以外の声に驚いた私たちは、準備をしていた手を止め、声のした方へ振り向いた。……そこにいたのは私やエイ

ト、ミーティアと同年代くらいの一人の少女だった。ん？……この子はトロデ王を見てもなんとも無いのかな？てつきり怖がるものだと思つてたけど……。

「お待ちください。実は、あなた方をお願いをしにこうして駆けつけてきました」

「ふむ？お嬢さん、お主はわしのこの姿を見て怖く無いのかね？」

トロデ王が私と同じ疑問を少女に投げつけた。

「夢を見たんです。『人でも魔物でも無い者がやがてこの町を訪れる……』。その者が其方の願いを叶えるであろう……』と」

「ひ、人でも魔物でも無い!?それはわしのことか？」

少女の言ったことに少なからず傷がついた様子のトロデ王を尻目に、ヤンガスはケラケラと笑い、エイトは苦笑をこぼしていた。夢見……か。サザンビークの書物庫で本を開いてみた事はあつたけど、本当にあるなんてね……。

「あつ……ごめんなさい」

自分が言ったことに気がついたのか、慌てて謝罪をしてくる少女。トロデ王もさすがに自分の娘ミーティアと同じくらいの歳の子に頭を下げさせるのには気が引けたみたいで、すぐに直る様促した。

「まあ良い。それにしても其方……わしらのことを夢でみたと話しておつたが……どうにもよくわからぬ話じゃな……」

「あつ、申し遅れました。私は古い師ルイネロの娘のユリマと申します」

「ルイネロって．．．．．酒場で会ったあの．．．．．」

「はい。多分そのルイネロです。あの．．．．．どうか私の家まで来てはくれませんか？詳しい話はそこです。町の奥の井戸の前にあるのが私の家なので．．．．．待ってますので来てくださいね」

ユリマと名乗った少女はそう言い残すと町へと戻っていった。

「え、えらい!!」

「!?!」

静寂とした空気が流れる中、突然のトロデ王の大声に私たちは盛大に驚いた。

「わしの姿を見ても全く怖がらんとは．．．．．さすがはミーティアと同じ年頃の娘よ!」

．．．．．それは関係ないと思いますよトロデ王。心の中でそうツツコンでおく．．．．．。

「ここは．．．．．あの娘のために人肌脱ごうではないか!」

「よろしいのですか陛下?俺たちにはドルマゲスを追うという目的が．．．．．」

「もちろんそうじゃが、せつかくわしらを頼ってきてくれているの

じゃ。それを無下にしてしまつてはトロデーン王国の王としての威厳が立たなくなつてしまうのでな。今回は、その件は後回しじゃ！」

「……………分かりました」

なぜかいつもよりも興奮気味にそういうトロデ王にエイトも戸惑いを隠せていなかった。……………そういえばトロデ王って昔から興奮するとすぐに周りが見えなくなつて、大事な目標を見失うことがしばしばあつて大臣たちに怒られてたっけ？久しぶりに会つたけど、そんなところも変わつていない様でどこか安心していた。

「じゃあ、俺たちがユリマさんの家で話を聞いてきますので、陛下はここで待機を……………」

「あ、それなんだけど……………私は行かなくていいかな？」

「え?!なんで!？」

私の突然の行かない宣言に3人は驚きを隠せない様子で私のことを見ていた。……………そんなに驚く様なことかな?至極当たり前のことなんだけど……………。

「なんでつて……………こんな夜更けに3人で押しかけるのは迷惑でしよ?それに私が言ったところでできることなんてたかが知れてるし……………それなら行くよりも待機してた方がいいでしょ?だから……………ユリマさんのところには二人だけで行つて?」

「そうですがすね。夜中に大勢で押しかけるのは迷惑でげす」

「……………ヤングスに“気遣い”つていう概念がわかるなんてね?」

「ひどいですが姉貴〜！」

「お主らー！いつまで話し込んでおるのじゃー！さっさと行って話を聞いてくるのじゃー！」

「すみません……………」

「へ〜い」
トロデ王に怒鳴られ萎縮した二人は、大慌てで町へと戻っていった。後は、二人の報告を待つのみ……………よし。

「私は少し休もう……………」

そうぼやきながら私は馬車に背中を預ける様にして座り込み、休息を取り、果報を待つのだった……………。

滝の洞窟へ

「綺麗な月……………こうやって落ち着いて月を見るなんて久しぶりかも」

エイトとヤングスがユリマさんのところへ話を聞きに行ってる間、私は町の外で静かに夜空の月を見上げていた。元から月を見るのは好きだったけど、最近は女王になるための政務や儀式をしていたこともあって忙しく、こうやって落ち着いて月を見る機会があまりなかった。だから、今はどこことなく爽快な気分だった。

「シシリーよ……………少し良いかの？」

「トロデ王? はい、なんででしょう?」

そんな中、同じくここで待機をしていたトロデ王が私に声をかけにきた。

「お主、やはりどこかで見かけた事がある様なのじゃが……………」

「(ギクツ) えっ!? そ、それは以前にも話しました通り、エイトと顔立ちが似ているからだと申しましたが?」

「そうじゃが……………どうにもそれだけではない様に思えてのう……………随分と昔に会った事がある様な……………そんな気がしてならんのだじゃ」

「(ギクギクツ) つ……………」

唐突なトロデ王の昔会った事があるんじゃないか発言に私は体をこわばらせた。ま、まずいな……。

「シシリーよ。お主……出身はどこじゃ？」

「出身は……」

出身という痛いところをついてくるトロデ王。……どうしよう？正体をバラす？……いや、ここで正体をバラして王女王女言われるのだけは絶対に嫌だし、今後の旅にも支障をきたすかも知れない。……仕方ない。せめて出身地だけでも伝えて後は適当にはぐらかそう。

「出身は、サザンビーク王国です。残念ですが、トロデ王と私は初対面ですよ？トロデ王は何か勘違いをされているのでは？」

「うむ、そうかの？それならばすまぬ事をしたな。……して、お主の出身はサザンビーク王国と言ったかの？であるならば、姫の婚約者である王子について何やら知っておる事はないかの？」

「知ってはいますけど……」

「おお！そうかそうか！では、その王子について教えてはもらえぬかの？わしは王子とはあまり会ったことがないのでな」

「……」

もちろん知ってる。だって従姉弟だし……。とは言え困ったな……。もしありのままチャゴスのことを伝えれば間違いないくトロデ王は失望するし……。それにサザンビークの名に傷がつく可能性がある。……それは流石にまずいし……

仕方ない。不本意だけど国のためだ。

「王子はとても素晴らしいお方ですよ。勉学や剣術にも長け、政務にも精を出しています。おまけに積極的に奉仕活動等も行っているため、国の人々からも信頼が厚く、次期国王に即位するのも時間の問題という噂も出ています。まさに完璧とも言える王子様です」

「ほうーそれでこそ我が娘であるミーティアの婿殿である！今からでも会える日が待ち遠しいのう……」

「はは……」

トロデ王の満更でもない表情を見せられ、私は苦笑を浮かべながら少なからず罪悪感を覚えた。

「(うう……すみませんトロデ王……。チャゴスは今言ったこととはまるで逆の王子で“ダメ王子”と言われているのです……。それと、叔父様の後を継ぐのは私なんです……)」

「ああ……。そう言えばじやが、サザンビーク王国には王子の他にもう一人、“王女”もいるとされているのじやが、その者ともこのところはあっておらんのか。名は……“システィア”と言ったかのう……。む？どうかしたのかシシリーよ？」

「い、いえーなんでもありませんっ！」↑(声 裏返ってる)

「そうか。早く会いたいのか……ふんふんふん♪」

し、心臓に悪すぎる……。まさかそのシスティア王女が自分の目の前にいるとは思ってもいないトロデ王はご機嫌そうにそう言っていた。今回はトロデ王の鈍感さに感謝しないと……。まあ

見た目も装いもだいぶ変えてるからそう簡単には見分けられないとは思うし、しばらく正体がバレる事はないでしょ。……とにかく今はこれ以上話を蒸し返して墓穴を掘らない様にしないと……。

結局、その後はトロデ王と気まずい雰囲気の中二人を待つこととなるのだった（二人は10分後に戻ってきた）。

「ふむふむ、そういう事情があったんじゃない……」

エイトとヤングスが戻ってきた後、私とトロデ王は事情を聞いていた。何でもユリマさんの父であるルイネロさんが捨てたとされる水晶玉を探してきて欲しいと頼まれたらしい。元々、腕利きの占い師として有名だったルイネロさんだったけど、ある時期を期にその占いが全く当たらなくなってしまい、今の様な酒に溺れる人となってしまっている様らしい。そんな父が見ていられなくなったユリマさんは、私たちに水晶玉の搜索を依頼することにした様で、その水晶玉は彼女の夢のお告げによると“大きな滝の下の洞窟”にある様だ。

「え、えらい!!なんて親孝行な娘さんなのじゃ!わしは感動したぞ!」

一通りの話を聞き終わった後、トロデ王はまた大きな声を出しながら感嘆に浸っていた。

「しかもそのルイネロと言う者が本来の力を発揮すれば見つからぬ者はないそうではないか。うまくいけば其奴にドルマゲスの動向を

探ってもらえるかも知れぬかもしれん！まさに一石二鳥じゃな！」

「そうですね。そうとなれば今はとにかくその水晶玉を探しにいきましよう！」

「そうじゃな。じゃが今日はもう遅い。わしと姫は外で過ごすが、お前たちは宿屋に泊まり明日への鋭気を養うが良いじやろう。出発は明朝。遅れるでないぞ？」

「わかりました」「はい」「うすっ」

出発の時間を確認した私たちは、トロデ王とミーティアを残し、町中の宿屋へ泊まった。今日はいろいろありすぎて疲れていたこともあって、床についた私はすぐに寝息を立てるのだった……。

滝の洞窟と主

「さて！出発するぞい！目指すは滝の洞窟じゃったな？わしとミーティアはお前達の後についていくからそのつもりでな」

「わかりました。魔物等はお任せを……………」

翌日になり、私たちはユリマさんの願いを叶えるべく、滝の洞窟での水晶玉探しを開始しようとしていた。滝の洞窟というのはそこまで遠くはないらしく、ここからでもその洞窟が見えるくらいだ。道中は魔物に気をつけていれば特に苦労もなく辿り着けるだろう。

「姉貴。ちよつといいですが？」

「？どうかした？」

魔物を狩りながら洞窟を目指している中、ヤンガスが何か聞きたそうに尋ねてきた。

「姉貴って随分と強いですが、何処かで鍛錬でもしてたんだけすか？」

「ああそうそう。俺もそれは気になった。俺たちよりも明らかに戦い方も上手いし、魔法もすごく使えるし、シシリーの家ってそう言った鍛錬してるの？」

「そうだね……………」

エイトまで話に乗ってきかかってきて、どう説明しようか迷っていた。まあでも、簡単にざっくり説明すればいいか。

「うん。なんか将来のためになるとか言ってみっちり叩き込まれたよ。女なのに容赦なくて正直あの頃は地獄だったよ……」

「あはは……シシリーも大変だったんだね……」

「そうだがすね〜。でも、姉貴がそんなに強い理由が何となく分かったんで良かったでげす」

「そっか。良かった」

どうやら納得してくれたみたいで、二人はそれ以上は何も言わなかった。あながち私の言ってることも間違っていないよね？次期女王になるからとか言って鍛錬を強要されて……違う意味で地獄を見て、それで今に至るわけだし。まあ、それがあったから王の儀式も達成出来たし、こうして旅の許可も下りたんだし、感謝はしないかね。

その後、何の問題もなく滝の洞窟に着くことに成功した私たちだった。

「洞窟内は暗いな……。松明がないと本当に何も見えないぞ……」

「トロデ王達を置いてきて正解だったね。こんな足場が悪いとこだと行けるとこも限られちゃうから……」

洞窟内は危険ということでトロデ王達を外で待機させた私たちは、松明をかざしながら洞窟内を散策していた。

「お、開けたところに出たがすね。．．．．．む？あそこに何かいやがるでがすよ？」

「あれは．．．．．魔物か？なんか門番みたいに仁王立ちしてるけど．．．．．」

しばらく洞窟内を進んでいると、随分と開けた場所に出たわけなのだが、奥に続くと見れる道の真ん中に何故かハンマーを持った魔物【おおきづち】が立っていた。何だろ？「ここを通りたければ俺を倒せ！」的な流れかな？よくわからない私たちは、魔物に近づいて行つた。

「ほほう？このオレ様に話かけるとはな？少なくともさつき来た旅商人よりは骨がありそうだな。さてと．．．．．わかつてるよなお前たち？」

「．．．．．何を？」

「惚けなくとも良い。この先に進みたくばこのオレ様を倒すしかないということだ。お前たちにその度胸はあるか？」

「度胸って．．．．．」

度胸も何も．．．．．相手が魔物なら問答無用で戦うだけなんだけどな．．．．．とは言っても喋る魔物なんて珍しい．．．．．私は見たこと無かったけど改めて見ると、こんな感じなんだね。

「そつちがやる気なら俺たちはやるだけなんだけど？」

「そうだがす！」

「そ、そうか……オレ様に勝負を挑むか……お前たちの度胸は大したものだが……という事は腕にも相当の自信を持っているということだな……」

こつちに戦う意思があると見ると、途端に口籠る魔物。あ、これっでもしかして……この魔物……口だけ？

「おい！そこの女！今……オレ様は口だけで大した事ないって思っただろ!？」

「あれ？何でわかったの？」

「否定せんのか!?!……そんな事は決してない!だが……今回はお前たちのその度胸を見込んでここを通してやることにしよう!感謝するのだぞ！」

……なんか妙に間があつたのが気になるけど、通してくれらるっていうなら遠慮せずに通ることにした私たち。随分と上から視線だったけど、絶対に見掛け倒しだけでやってきてきたあの魔物……いずれボロが出るのが目に見える……

妙な時間を使った私たちは、そのままさらに洞窟の奥へと進んでいった。

「綺麗な湖……洞窟の奥にこんな場所があるなんて……」

「随分と変わったところだよな？道も一本しかないし、誰かが作ったみたいだ……」

洞窟の奥は随分と開けた場所で、綺麗な湖の上に一本の道があると
言った感じだった。そのまま道を進んでいくと一つの水晶玉が滝壺
で浮いている奇妙な光景を目にした。

「何で水晶玉が浮いてるの？」

「わからないけど……俺たちの目的はこれを持ち帰ることだし、
これを持って早く出よう！」

「そうだがすね……む！兄貴！姉貴！何か来るでげす！」

エイトが水晶玉に触れようとした時、ヤンガスが何かを悟ったのか
私たちにそう叫んだ。それを聞いた私たちは同時に臨戦態勢に入っ
た。

「キシャーッ!!……ふあっ、ふあっ、ふあ！驚いたじやろう!？」
わしはこの滝の主の“ザバン”じや」

滝の中から出てきたのは“ザバン”と名乗る赤い鱗を持ち、額に傷
がある魔物だった。

「長いこと待っておった……お前で何人めになるかのう……」

「あ……何言ってるの？」

「さあ？」

一人で勝手に語ってるザバンに私たちはついて行けてなかった。急に“待っていた”とか“何人め”とか言われてもこっちは混乱するだけだからだ。

「今度こそ……今度こそ……と思いつながらこれ十数年……長い歲月であったな……。さて、前置きはこれくらいにしておこう……。いいか？正直に答えるのだぞ？……お前達がこの水晶の持ち主か？」

「そうだと云ったらどうするの？」

「おおっ!!そうかそうかお前達が持ち主であったか!このたわけどもがっ!いやというほど懲らしめてくれるわ!!」

ザバンは咆哮して私達を威圧すると、襲いかかってきた。別に私たちが持ち主って言ったわけじゃ無かったんだけどな……。まあこうなった以上しようがない。やるしかないか!

私たちとザバンの戦いが……。今始まる。

対決！ザバン

「食らうが良いわ！」

ザバンがそう叫ぶと同時に地面から何やら黒い霧の様なものが現れ、私たちを飲み込もうとしてきていた。その霧はどこか毒とは違う何か禍々しいオーラを纏っている様な感じなのだが……もしかしてこれって？

「っ！まずいつ！二人とも下がって！」

「姉貴!? いったい何を……って、何でがすかこの霧!? 身体が動かせ……っ」

「ヤンガス！」

その霧の正体にいち早く気づいた私は、霧に巻き込まれる前に一歩後ろに下がり、その霧を回避する事に成功した。だが、反応が遅れたエイトとヤンガスはそのまま何も出来ずに霧に巻き込まれてしまった。……何故か、エイトは巻き込まれても何ともない様だけど、ヤンガスに至っては体がまるで麻痺をしているかの様に動けなくなってしまうていた。……やっぱりそうだったんだ。

「エイト。大丈夫？」

「ああ、俺は何とか………だけどヤンガスが………」

「おそらくあれは呪いだよ。あの黒い霧に触れると呪いにかかってしばらく動けなくなるみたい。でも、幸いエイトは呪いに強いみたいだ

し、他の攻撃に気をつけてれば大丈夫だよ。ヤンガスを助けるのはとりあえずザバンを倒してからにしよう」

「そうだな……」

とにかく今はザバンを何とかしないとヤンガスを助け出すこともできない。そう悟った私たちは、エイトを先頭にザバンへ攻撃を仕掛けた。

「やるのう！【ギラ】！」

「任せて！【ベギラマ】！！」

「なっ!? わしの呪文を飲み込んで……ギヤアアア……ツツ！！」

私が放った【ベギラマ】は【ギラ】をそのまま飲み込み、ザバンへと直撃した。

「まだまだ！【ヒヤダルコ】！！」

「グギヤアア……ツツ！！」

「今だよエイト！お願い！」

「ああーいくぞー！」

私による魔法の追撃によってだいぶ体力が削られたのか、明らかに疲弊しきってる様子のザバンにエイトが止めをさしに駆け出した。

「お、おのれ……」

「【火炎斬り】!!」

「うぐわああ………っ」

エイトの攻撃を避ける気力もなかったのか、まともに攻撃をくらったザバンは盛大に吹き飛び、手を地面につけながら額の古傷を押さえていた。

「痛い、痛い、痛いわ………古傷が痛むわい………それもこれもお前達のせいじゃぞ!」

「仕掛けてきたのはそつちでしょ………」

「そこじゃないわい!お前達がこの滝にこんな水晶を投げ込むことがそもそもの原因なのじゃ!」

「俺たちじゃないよ………」

「なに!?さてはお前達、この水晶の持ち主ではないな!………じゃが確かにわしの偉大なる攻撃にもびくともせんかったお前達は占い師には見えんのう………」

「そうだがす!誤解だ誤解!」

いつの間にか呪いが解けたのか、ヤンガスも会話に参戦してきた。

「そういうえば水の流れに乗ってこんな噂を耳にしたのう。トロデーンという城が呪いによって一瞬のうちにイバラに包まれた。ただ二人の生き残りを残してな。その二人は何故か御者を乗せた馬車を連れて旅に出たという………」

「兄貴、姉貴・・・・・・・・それって・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

うん。どう考えても私たちのことだよね？まさかこのザバンが知ってるとは思ってもなかったけど。

「それは多分俺たちのことだよ」

「そうか・・・・・・・・やはりお主らであったか。そんなお主らが何故水晶を求めるかは知らんが、この水晶はお主らにくれてやろう。わしに勝ったのじゃからな」

「うん。ありがとう」

私はお礼を言いながらザバンから水晶を受け取った。これでとりあえず目的は達成したね。

「それからじゃ！」

「ん？まだ何かあるのか？」

「もしお前達が水晶の本当の持ち主に会うことがあつたら伝えてくれい！『むやみやたらと滝壺に物を投げ捨てるでない！』とな・・・・・・・・そろそろわしは失礼するぞい。古傷が痛むのでな・・・・・・・・」

ザバンはそう言い残すと、滝の中へ帰っていった。その言葉だけでも私は何となく察することができた。

「ルイネロさんは、水晶を無くしたわけじゃなく、自らの手でここに

捨てたってことか………いったいどうしてだろ？」

「………?どうかしたシシリー?」

「ううん。何でもない。さ、早く帰ろつか。トロデ王も待ちくたびれてるだろうしね」

その事は後で本人に聞けば良い。そう割り振った私は、二人とともに洞窟を出るのだった………。

ユリマの想い、そしてドルマゲスの行方

「……………ようやく来たか。そろそろ来る頃だと思っておったわい」

無事に水晶玉を見つけた私たちは、洞窟を出てトロゲ王達と合流した後、すぐにトラペツタへと戻りルイネロさんとユリマさんの家に赴いていた。ルイネロさんは驚いた顔をするかなって思っていたけどそんなことは無く、まるで私たちが水晶玉を見つけてくることを予想していたかの様な振り舞いを見せていた。

「どうやらユリマに頼まれた物を見つけてきた様だな……………」

「すごいですね？さすがは占い師ルイネロさんだ……………」

「腐ってもこのルイネロ、それぐらいのことであればわかるわい。この玉がただのガラス玉であつてもな……………」

そう言うルイネロさんは久しぶりに見る自分の水晶玉を見ても、何の反応も示さなかった。むしろ“余計なことをするな”とでも言いたげな視線を私たちにぶつけてくるだけだった。

「だが無駄なことよ。いくら本物の水晶を持つてこようとまた捨てるのみ！わしが水晶を捨てたのはとある理由があったからだが……………まあ今はそれは良い。その事についてはユリマも知らん事だからな」

「おっさん……………なに言ってるがす？」

「……………気にするな。とにかくだ！わしは一度その水晶を手放したのだ！もはやわしに持つ資格などない！その水晶玉をよこせ！今

度は二度と拾って来れぬよう、粉々に砕き割ってくれるわ！」

「待って！お父さん！」

ルイネロさんが、私の持つてる水晶玉を破壊しようとして手を伸ばしたところで今まで家の奥にいたユリマさんが割って入ってきた。

「私、もう知ってるから！ずっと前から……。何で水晶を捨てたのか……。知ってるから……。」

「ユリマ……。お前……。じゃあ自分の本当の親のことを？」

「……。うん」

静かに頷くユリマさん。……。本当の両親っていうことは、ルイネロさんはユリマさんの本当のお父さんでは無いってこと？……。それが本当なら彼女の両親はいつたい……？

「でもね？私、お父さんのせいで両親が死んだなんて思っていないよ？」

「……。どうしてだ？そこまで知っていながら何故そう思えるのだ？このわしを恨んでもおかしくは無いぞ？」

「両親が……。死んだ？」

彼女の両親が既に他界していると知った途端、何故か彼女を私と重ねてしまっていた……。私もユリマさんのように両親を亡くして、今までずっと叔父様に育てられてきたんだ。彼女もまた、悲しいことを経験してきたんだ……。

「ううん。お父さんはただ占いをしただけだもん。私はよく知らないけど、お父さんの占いつて凄かったんでしょ？……だからどこに逃げたかも分からない私の両親のこともあつさりと当ててしまったんだよね？」

「……あの頃のわしは有頂点だったんじやよ。自分に占えないものはないとな。それもあつてか、わしは占えるものはかたっぱしから占ったもんじや。自分のことばかり考えて頼んでくる者が善人か悪人か……そんなことすら考えなかった……」

「もういいの……もういいのよ。だつてお父さんは一人ぼっちになった赤ちやんの私のことを育ててくれたじゃない……私、見てみたいな。高名だった頃の……自信に満ちていた頃のお父さんの姿を……」

「ユリマ……ありがとう……」

二人はそのまま抱きしめ合い、お互いに静かに涙をこぼしていた。二人はこの時、初めてちゃんとした家族になれたのかも知れない……私たちはその微笑ましい光景を、静かに眺めているのであった。

「んう……ん？……ふわあ……」

「おはよう。起きた？」

「エイト？おはよう……」

翌日、起きた私は既に起きていたエイトに挨拶をしながら髪型を整えていた。今私たちがいるのはルイネロさんとユリマさんの家だ。あの後、ルイネロさんとユリマさんが、水晶玉を見つけてきてくれたお礼と言うことでここで宿泊することを許してくれたんだ。疲れていたこともあつてお言葉に甘える事にした私たちは、そのまま眠りにつき、今に至ると言うわけだ。ちなみにヤンガスは今もいびきをかいて寝ていた。

ヤンガスはそのまま寝かせておいて、私たちは一階に降りて見るとそこには今までのガラス玉とは違い、私たちが見つけてきた水晶玉を目の前に置いて黙祷をしているルイネロさんの姿があつた。

「おはようございます」

「やつと起きてきたか。もう昼だぞ？この時間まで寝込むとは……相当に疲れておったのであろう。……む？もう一人の者はどうした？」

「まだ寝てますよ」

「そうか。ともかくお前達には礼を言わねばならんな。お前達が持ち帰った水晶もこの通り収まる位置に収まったぞ。さて……さつそくだが占つてやろう」

そう言うと、ルイネロさんは両手を水晶玉へとかざし、集中した。

「……………こうやって真剣に占うのはいつ以来であろうな。これもお前達のおかげじゃ……………む!?こ、これはどうしたことかっ!?見えるぞ!見えるぞ!道化師のような男が“南の関所”を破っていったらしい!どうやら奴がマスター・ライラスを手にかけて張本人のようじゃの」

「道化師……………エイト?」

「ああ、間違いないな……………」

「こやつは……………確か……………いや、だいぶ感じが違っているが、その昔ライラスの弟子であった……………ド、ドルマゲス!」

「な、なんだってっ!?!」

ルイネロさんがそう叫ぶと、今まで寝ていたはずのヤンガスがドタと階段を勢いよく駆け下りてきて、水晶玉を凝視した。

「兄貴!姉貴!ドルマゲスっついやあ、お二人とトロデのおっさんが追っていた性悪魔法使いの名前じゃっ!」

「ヤンガス……………階段は静かに降りてきなよ……………迷惑になるでしょ?」

「す、すいやせん!……………で、その先はもつと詳しく分からねえのかよ!?!」

私の注意を聞いているのか聞いてないのか分からない謝罪をしたヤンガスは、そのままルイネロさんに続きを促した。

「……残念じゃがわしが占えるのはここまでのようじゃ。申し訳ないのう……」

「十分ですよ。とにかくドルマゲスは南へと向かったんですよ？それだけ分かっただけでもありがたいです」

「そうか。お前達には世話になったからのう。力になれたのであれば何よりだ。今後何か占って欲しければいつでも訪ねてくるがよい。いつでも力になるぞい」

「ありがとうございます。では私たちはそろそろ……」

私たちは、そろそろトロデ王達の元へ戻ろうと家を後にしようとしていた。だが、エイトとヤンガスが外に出たところで私だけが何故かルイネロさんに呼び止められた。

「シシリーと言ったか？」

「？はい、そうですが？」

「お主……なにやら隠し事をしておるな？」

「っ!? ……え、えつと……」

ルイネロさんの突拍子もないその言葉に口籠ってしまう私。その様子を見ていたルイネロさんは高々と笑いながら言った。

「はっはっは！ その様子では凶星か。……隠し事も良いが、いつまでも隠し切れるとは思わぬことだ。いずれ話すときがきつと来る。……そのことを決して忘れるでないぞ？」

「……………はい」

そのルイネロさんの言葉を胸に刻みつけた私は今度こそ家を後にした。エイト達から何をしていったのかって聞かれたけど、適当にはぐらかしておいた……………。……………。ルイネロさんの言った通り、いずれこの二人やトロデ王達にも伝えるときが来るのかも知れない。私の正体のことを……………。いつになるかは分からないけど、そのときが来るまでは私は今の自分を演じようと思っている。仲間のために……………。

私は、その決意を胸に新たなる地へと足を踏み入れるのだった……………。

リーザス村編 リーザス村へ

「な、なんじゃと!? マスター・ライラスを手にかけたのがわしらが追うドルマゲスだったじゃと!?」
「あやつめ、自分の師になんと言ふことを・・・・・・」

町の外に出た私たちは、待っていたトロデ王に占いのことを話した。トロデ王もまさかマスター・ライラスが死んだのがドルマゲスのせいとは思っていなかったようで、心底驚いていた。

「して、南の方角へ奴は向かったそうじゃな? こうしてはおれん! 皆のもの! 早く奴の後を追うぞい!」

トロデ王の号令とともに、私たちは南に向かうべく歩を進めた。地図を駆使し、魔物を倒しながらトラペツタから南に進んでいると、何やら“見るも無残に門が破壊されていた関所”を見つけることができた。

「な、なんでがすこれは!? 門が壊されているでがすよ!」

「・・・・・・それもただ破壊されてるだけじゃない。何か・・・・・・強力な魔法で焼き壊されてるみたいだな・・・・・・」

「うん。ドルマゲスの力量がうかがえるね・・・・・・」

普通の魔法であればこんな壊れ方はしない。・・・・・・むしろ壊せないのではないかな? これだけを見ても、ドルマゲスがどれだけの実力を持っているのかは誰でも明らかだった。途端に少しドルマゲ

スのことを怖く感じた……………。

「あやつの力は未知数じゃが……………わしらは止まってはおれん。どんな奴じやろうと追いかけるのみじや！」

「……………そうですね。すみません陛下。少し弱気になってました」

「アツシらであればこんだけの奴だろうと、きっと倒せるでがすよ！頑張りやしよう！」

「ヤンガスは明るいね……………」

まあ……………怖がつてる私よりはマシだけどね……………ふう、切り替えないと。私だけ弱気になってたって何も始まらないし、もう忘れよう。

関所を越えると、近くに村があるのが見えた。とは言っても見えるのは巨大な風車とアーチだけなんだけど……………あれ？あの村つて……………。

「リーザス村？」

「ん？シシリーはあの村を知ってるの？」

「以前に一度だけ来たことがあるの。のどかな村で村の人みんな優しくかったから居心地は良かったよ」

まさか南にあるのがこの村とは思わなかったけどね……………。だけど、あの村に入るとなると問題点がある。

「……………」

「む？どうかしたのかシシリよ？」

「い、いえ……（あの村……もしかしたら私のこと知ってる人がいるかも知れないんだよね……。何せ最後に来たのが二年前だし……。いくら姿を変えているとはいえ、バレないって保証はないんだよね……）」

以前にも言った通り、リーザス村には訪れたことがあった。それもトロデーン王国のように十年単位ではなく、二年前という最近だ。その時はあまり時間がなかったこともあって、あまり滞在はしていなかったが村の特産物などをもちょうための交流などはしていた。だからこそ、私の顔が割れている可能性があるんだ。でも……

「（あの時の私とは明らかに装いも髪型も違うし、エイトとヤングスの後ろを静かに目立たないように歩いていけば大丈夫じゃないかな？……。うん。それで行こう！）とりあえず、あの村の人たちにドルマゲスのことを知っているか聞いて見る事にしませんか？何か情報を得られるかも知れませんか？」

「それは名案じゃな！よし！早速あの村へ向かうぞい！」

私の提案に全員が賛成し、私たちはリーザス村へと赴く事にした。だが、そこで私は思わぬ人と再会することとなるのだった。

「いい村だね……」

「そうだがすねく……………」

「久しぶりに来たけど、なんも変わってないね……………」

例によってトロデ王達を外に残してきた私たちは、リーザス村の中を見てそれぞれ感嘆をしていた。

「むっ！待てっ!!お前達、何者だ！」

「へっ?」

そんな中、突然私たちに声を荒げて詰め寄ってきたのは、二人の小さな少年だった。

「いや分かってるぞ。こんな時にこの村に来るってことはお前らも盗賊団の一味だな！」

「はっ?!い、いや……………君たち何を言っ……………」

「問答無用!!マルク!こいつらサーベルト兄ちゃんの仇だ!成敗するぞー!」

「がってんポルク！」

いやいや……………成敗って。全然話についていけないんですけど?それはエイトもヤングスも同じのようで、呆けた顔をしていた。そんな私たちを置いてけぼりにしながら二人は臨戦態勢に入っていた。

「いぎー尋常に勝……………いてっ!?!」

「ふえくん！」

「何をしてんだいお前達は!?この方達は どう見ても旅のお方じやろうが！」

そんな二人の少年を後ろから来たお婆さんのゲンコツが襲った。 解決 なのかな？

「お前達、ゼシカお嬢様から頼まれごとをしとつたんじやろう。全くフラフラしおってからに ほれほれ！ゼシカお嬢様からお叱りを受ける前にさっさと行かんか！」

「ふわあ〜い 」

かなりきついお説教を受けた二人は泣きべそをかきながらどこかへ走っていつてしまった。

「すみませんねえ旅の方。あの子達も悪い子じやないのだけど 」

「気にしないでいいですよ。子供のやることですし 」

「そうですか。ありがとうございます。最近村に不幸があつたもんで おっと、詳しい話は村の者にでも詳しく聞くといいじやろう。 この村はいい村じや。ゆつくりされるが良い 」

そう言い残すと、お婆さんは自分の家に戻っていった。いい村 か。それは最もだ。 あ、そういえばあの人は私のことは気がついてなかったみたいだね。 やつぱりこの変装ならバレることは無いのかな? 少し安心。

「よし。俺たちは村の人たちから話を聞こう。誰に聞くのがいいんだろ？」

「それだったらアルバート家がいいと思うよ。アルバート家はここら一带を修める名士の一家だから、きっと何か知ってると思うよ？」

「姉貴は随分と物知りでげすね〜」

「う、うん。 前来た時に村の人から聞かされてたから……………」

嘘です。本当は勉強に励んでいた頃にその一家のことを知ったからです。……………とはいえ、私の案は理に適ってると思う。これらの地域にはアルバート家が一番詳しいはずだし、情報も何かしら持ってるはずだ。

とにかく話を聞く事にした私たちは、アルバート家の屋敷へ足を運ぶのだった……………。

思わぬ再会

アルバート家の屋敷は少し高台の場所にあり、そこから村全体を見渡すことが出来るようになってるらしい。そんなアルバートの屋敷に私たちは話を聞くべく、赴いていた

「あの、俺たちここのアルバート家の人とお話したいんですけど……」

エイトは中にいた一人の用心棒？的な人に声をかけていた。だが、その人はどこか浮かない顔で答えた。

「お話ですか？それは構いませんが……今は奥様もゼシカお嬢様もあまりお加減が優れてない様子ですのでお相手できるかどうかは……」

「それならそれでいいですよ。兄貴、姉貴、行ってみましょう！」

「うん。シシリーも行こう」

「分かった」

私たちはとりあえず話を聞いてみようとして、屋敷の階段を登った。一応私は二人の後に続く形で行って行ってるけど、ばれてる様子は無いし、特段問題はなさそうだし……だが、その考えはすぐに崩壊した……

「あれ？何だい君たちは？」

「？あなたは？」

「よくぞ聞いてくれたね！そう！僕こそサザンビーク王国の大臣の息子にしてゼシカのフィアンセでもあるラグサット……」

「二人とも？なんで止まって……えっ？」

なぜか階段が上がった先で二人が止まっていたから、二人の間をかき分けてみたところ……そこには今私が会っては非常にまずい人がいた……。

「ん？……っ!!シ、シス……んぐっ!!」

「あ、危ない……」

その目の前の人物、ラグサットが私の姿を見た途端、一瞬疑わしそうな視線を送ってきたが、私の正体がわかった途端大きく目を見開き、盛大に二人の前で正体をバラそうとしたため私は慌ててラグサットの口を防いだ。

「姉貴？そいつと知り合いでげすか？」

「まあ……そんなものかな。私ちよつとこの人とお話があるから二人は奥様かゼシカさんに話を聞いてきてくれる？」

「そっか。分かった」

エイトとヤンガスは私の言うことをすんなり聞いてくれ、その場を離れて行った。二人が離れたことを確認した私は、静かに目の前のラグサットに視線を向けた。

「……なんでこんなところにいるの？ラグサット……」

「わ、私は婚約者であるゼシカの顔を見にきたのですよ……。なんでも、最近ゼシカの兄であるサーベルトが盗賊に襲われて亡くなったって話を耳にしましてね？……です、慰めにこよ……うと……。シ、システィア殿下こそ……なぜこのよ……うな所に？陛下はなんとおっしゃられているのですか？」

「私は旅に出ているだけ。叔父様にも許可は貰っている。……大丈夫。少ししたらサザンビークに帰るから……。」

「そ、そうですか……ならばいいのですが……。」

いまだに私がこの場にいるのが信じられないのか、目を白黒させているラグサット。このラグサットはサザンビーク王国の大臣の子息で、大臣家の跡取りでもある。もちろん私とも交流もあり、一緒に政務などを行ったこともあった。……まさかこんなところで会うとは思わなかったけど……。

「いい？ラグサット。ここで私に会ったことは誰にも話さないでね？話をややこしくしたくは無いですよ？」

「……分かりました。ですが、あなたの正体を知るものは他にも……。」

「その時はその時。とにかく貴方はゼシカさんのところに行きなさい。フィアンセであるならゼシカさんを元気付けて見せてよ……。」

「はっ……。」

ラグサットは私の平伏すると、その場を離れて行った。……久しぶりな王女様モードだったけど、やっぱり疲れる……。だからあまり私を知る人と会いたくなかったんだ……。

「まあ……いいか。とりあえず、エイト達と合流しよう……」

「あ、いたいた。エイトと話しているのは……アローザさんか。あの人なら何か知ってるのかな？」

ラグサットとの話もケリがついた私は、このアルバート家の当主、アローザさんと話すエイト達を見つけ出した。

「変な杖を持った道化師のような男を目撃しませんでしたか？」

「道化師……ですか？すみませんね。存じ上げないです……」

「ちよつとでもいいんですがす！なんかないですか？」

「申し訳ありません。本当に知らないのです……力になれず……申し訳ありません」

遠目から聞いてたけど、アローザさんの声がどこか疲弊しきつていると言うか悲しそうな声に聞こえた。確か、ラグサットの話では息子であるサーベルトさんが亡くなったんだっけ？……それは確かにあんな調子になってもおかしくない……。

「そうですか……ん？あれ？シシリー！もう戻ってたんだ！もうあの人との話は終わったの？」

私がそんなことを考えている中、私に気づいたエイトがこちらに近づいてきた。

「うん。それで、そっちはどう？何か情報は得られた？」

「アローザさんに聞いてみたんだけど、何も知らないって」

「そっかく………しょうがないね」

アローザさんでも知らないものは知らないってことか。そうであるならばこれ以上詮索してはかえって迷惑になってしまう。そう思った私は二人に屋敷を出ようと促した。

「あら………？貴女………どこかで………!?」

「(逃げよう!)………」

アローザさんの私の顔を見た時の反応を見た途端、私は嫌な予感を感じ、エイトとヤングスを置いて猛烈な勢いで屋敷の外へと出た。……あの様子だと多分バレたよね?……うう、こんなこと毎回続けてたら私の身がもたないよ……。

アルバート家に入ってたいそう疲れ切った私は、とりあえず二人を待つことにし、適当に村の中を散歩するのだった……。

あの日の真実

「シシリー！」

私が屋敷を出て少し経った後、二人が屋敷内から出てきた……約一名子供を連れて……。

「え〜つと？どう言う状況？」

「話すと長くなるんだけどね……。」

エイトとヤングスから話を聞いたところ、どうにもこの屋敷にいるはずのゼシカさんが部屋の中にいないことが発覚したらしい。エイトがいつも連れてくるネズミのトーポが、ゼシカさんの部屋から持ってきた手紙を今日の前にいる少年、ポルクに見せたところ、手紙に書かれていた“リーザスの東の塔”へ行き、ゼシカさんを連れ戻すと言うことになったようだ。……なんともまあ、面倒なことに……。

「なるほどね。つまりそのゼシカさんを連れてくればいってことね？」

「そうですが！なんでアツシらが人探しなんてやらなきゃいけないのか未だに謎なんですけど……。」

「おい！こうなった原因はお前達にもあるって言っただろ!? つべこべ言っていないでさっさと行くぞ！」

私たちのいうことなど知ったことかとも言わんばかりに、ポルクはさっさと村を出てしまった。私たちも慌ててその後を追いかけて、リーザスの東の塔へ向かうのだった。

「近くで見ると．．．．．とても大きいなく．．．．．」

リーザス村からこの塔まではそこまで離れてはいなく、数分で着いた。遠目からでも大きな塔だなんて思ってたけど、近くで見るとさらに大きく見えた。

「さて．．．．．さつさと中に入ってゼシカさんを探すと．．．．．あれ？開かない？」

「兄貴？何やってるんですが？開かないんだったらアツシが代わりに．．．．．つ!?あ、開かないでげす．．．．．」

二人が頭の中に入ろうと頭の扉を開こうとしているけれど、その扉は押しても引いてもびくともしてなかった。．．．．．何か特別な開け方でもあるのかな？

「はっはっは〜！その扉の開け方は村の人にしかわからないんだ！．．．．．見てろよ？．．．．．それっ!!」

ポルクは扉に近づくと、扉の取手ではなく、扉の下部の隙間に手を引っ掛けるとそのまま力一杯上へと押し上げた。なるほど．．．．．この扉は上にあげることによって開くようになっていたんだ。

「ざっとこんなもんだ。というわけでオイラが案内できるのはここまです。後はお前達に任せるからな！絶対にゼシカお姉ちゃんを連れ戻してこいよ〜!!」

ポルクはそう言い残し、村へと帰っていった。

「よし、道は開けたわけだし、中に入ろう。早くゼシカさんを見つけないといけないしね」

「中にも魔物はいるって話だからね。私たちも気を引き締めていかないと……」

「そうですがね……」

塔の中はとても入り乱れていて、目印でも建てていない限り、迷ってしまうのではないかと思えるほどだった。特に登っている途中にあった“回る壁”には苦勞させられた。

魔物に至っては、人面ガエルやカブト小僧、ホイミスライムなどがいたが、人面ガエルは人面状態の攻撃に気をつけていれば問題は無く、カブト小僧はこちらを転ばせて行動不能にする攻撃に警戒すれば脅威では無く、ホイミスライムは「ホイミ」で回復される前に集中攻撃で倒してしまえば安定して倒せる。結果として、特になんの問題もなく魔物達は退けた。

入り組んだ道に何度も迷い、魔物達の相手をしながら、一つ一つ階段を登って行き、やつとの思いで私たちは塔の頂上へたどり着くことができた。頂上にあったのは一つの女の人の銅像だった。目が何やら赤く光り輝いているけど、何か特別なものでできてるのかな？

「頂上って言うてもあるのは銅像一つですが………てつきり何かお宝でもあるもんだと……」

「ただの塔だもん。そんなのあるわけないよ………ってそんなこ

とより、ゼシカさんは？ここにはいないようだけど？」

「そういえば来る途中にも見かけなかったけど……どこに行つたんだろ？」

そう。私たちの目的は塔の頂上に行くことでは無く、ゼシカさんの捜索だったんだ。ここにくる途中にも見かけなかったことから、この塔にはすでに居ないのではないか……。そう思っていた矢先だった。私は後ろに人の気配を感じたため、振り返ってみると、そこには一人の女性の姿があった。

「っ!!あんた達……。とうとう現れたわね!リーザス像の瞳を狙って絶対にまた現れると思っていたわ!……。兄さんを殺した盗賊め!兄さんと同じ目にあわせてやる!」

「へ?うわっ!」

その女性は私たちを盗賊か何かと勘違いしているのか、エイトに向けて「メラ」を放ってきた。エイトは咄嗟に避け、そのまま「メラ」は銅像に当たり、銅像が燃え上がった。ん?待てよ?確かあの人……。『兄さんと同じ目!』って言ってたよね?……。もしかして!

「待ってゼシカさん!私たちは盗賊じゃ……。きやつ!」

なんとか説得を試みるものの向こうは聞く耳持たず、私たちに魔法を撃ってくるばかりだ。私の予想が正しければ、あの人がゼシカさんなんだろう。向こうの気持ちのことを考えれば、私たちは自分の兄を殺めた仇とも思ってるんだろう。確かにそれならばこの攻撃は納得だけど……。

「(勘違いとすればたちが悪すぎる!)お願いだから話を……」

「・・・・・・・・・・なかなかしぶといわね。だけどこれで終わりよ！覚悟・・・・・・・・・・しな・・・・・・・・・・さ・・・・・・・・・・い・・・・・・・・・・」

『ま・・・・・・・・・・待て・・・・・・・・・・待つんだゼシカ・・・・・・・・・・』

「「「!?」」」

ゼシカさんが最大限の魔力を込め、私たちに魔法を放とうとしている中、どこからとも無く聞こえてくる声に私たちは戸惑う。

『私だ・・・・・・・・・・ゼシカ・・・・・・・・・・私のことがわからないか?』

「まさ・・・・・・・・・・か・・・・・・・・・・兄さん?・・・・・・・・・・サーベルト兄さんなの!?!」

『ああ・・・・・・・・・・ゼシカ、その方達は私を殺した人たちでは無い。とにかくゼシカ・・・・・・・・・・その魔法を解くんだ・・・・・・・・・・』

「解けて言われても・・・・・・・・・・もう抑えられないわよ・・・・・・・・・・!」

「・・・・・・・・・・大丈夫だよ。【マホトーン】!」

魔力が暴走しかけているゼシカさんに、私は対象の魔法を封じ込める魔法【マホトーン】を唱えた。すると、途端にゼシカさんの魔法の威力は収まり、やがて静かにその魔法は消え去った。

「つ・・・・・・・・・・これは?」

「これで大丈夫でしょ? さあ、はやく行ってあげなよ?」

「・・・・・・・・」

何か言いたげな顔をしたゼシカさんだったが、そんなことよりも！とても思ったのか、私たちの横をすり抜け、声がした銅像の元へ駆け出していった。

「サーベルト兄さん？・・・・・・・・本当にサーベルト兄さんなの!？」

『ああ、そうだとも・・・・・・・・聞いてくれゼシカ。そして、そのの旅のお方よ・・・・・・・・』

「俺たちも？」

なぜ私たちにもと思ったけど、とりあえず聞いてみよう私たちは銅像に近づいた。

『死の間際・・・・・・・・リーザス像は我が魂のかけらを預かってくださいました・・・・・・・・この声もその魂のかけらの力で放っている・・・・・・・・だから・・・・・・・・もう時間が・・・・・・・・無い・・・・・・・・』

「「「・・・・・・・・」」」

『像の瞳を見つめてくれ・・・・・・・・。そこに真実が・・・・・・・・刻まれている・・・・・・・・。さあ・・・・・・・・急ぐんだ・・・・・・・・』

言われるがままに、私たちとゼシカさんは像の赤い瞳を覗いてみた・・・・・・・・するとそこにはサーベルトさんと思わしき人が塔の頂上に立っている姿が映し出されていた。

『あの日・・・・・・・・塔の扉が開いていたことを不審に思った私は・・・・・・・・』

一人でこの塔の様子を見にきた．．．．．そして．．．．．奴と
出会ったのだ．．．．．』

その瞳に映った光景．．．．．それはサーベルトさんが一人でリー
ザスの東の塔の様子を見にきた様子と．．．．．頂上でサーベルト
さんが道化師のような男と出会い．．．．．彼の胸を
道化師の持つ杖が貫通する光景だった．．．．．
しかして、あの男が．．．．．。

「ドルマゲス．．．．．なの？」

「おそらくそうだろうね．．．．．なんて酷いことを．．．．．」

私を含めた全員が憤りと悲しみの感情が出ているのがわかつた。
．．．．．それだけ奴．．．．．ドルマゲスは酷いことをし
たんだから。

『旅の方よ．．．．．リーザスの像の記憶．．．．．見届けてくれ
たか．．．．．私にも何故かはわからぬ．．．．．だが、リー
ザス像は．．．．．そなた達が来るのを待っていたようだ．．．．．
願わくばこのリーザス像の記憶が．．．．．そなた達の旅の助けに
なれば私も報われる．．．．．』

徐々にだが、サーベルトさんの声が薄れていつていることから、も
うすぐ魂のかけらの力も無くなるのだらうと思えた。

『ゼシカよ．．．．．これで我が魂のかけらも役目を終えた．．．．．
お別れだ．．．．．』

「そ．．．．．そんなっ！いやっ！待ってよ兄さん！逝かないでっ！」

ゼシカさんのその悲痛の叫びも虚しく、声はさらに遠くなつていった……。

『ゼシカよ……最後にこれだけは伝えたかった……この先も母さんはお前に手を焼くことだろう……だが、それでいい……お前は自分の信じた道を進め……さよならだ……ゼシカ……』

その言葉を最後に……サーベルトさんの声は聞こえなくなつた。どうやら役目を終え、天へと帰つたようだ……。ゼシカさんはその場で崩れ落ち、静かに涙をこぼしていた……。

「ふーむ……なんということじゃ。あのサーベルトとやらを殺した者、間違いなくわしらが追つておるドルマガスじゃ！」

「おっさん?! いつの間に!!?」

何故かいつのまにかこの場にいたトロデ王にヤングスだけでなく私たちも少なからず驚いていたが、トロデ王は気にせず喋り続けた。

「何故かわからぬが、あのサーベルトとやらもまた、わしらにドルマガスを倒せと言つておるようじゃった。ふむ……彼の想いを無駄にしてはならんな。これでまた、奴を追う理由が出来たというわけじゃ」

「そうですね。彼の死は……決して無駄にはしません」

「願わくば、サーベルトさんが安らかに眠つてほしいものです……」

サーベルトさんの死を見届けた私たちは、今は一人にしてあげようと、ゼシカさんをその場に残し、戻ろうとした。だがそんな折、ゼシ

カさんが私たちを呼び止めた。

「あ、あの……名前も聞かないで誤解してごめんなさい……。村に戻ったらちゃんと謝るから……だから、今はもう少しこの場にいさせて？ごめん……少ししたら帰るから……。」

「わかった。じゃあ私たちは先に戻ってるから……。」

これ以上この場にいるのは邪魔だと判断し、私たちは早急にその場を後にし、リーザス村へ戻るのだった……。

譲れない想いと決意

視点 エイト

俺たちは塔を後にした後、リーザス村に戻ってきた。すると、ポルクが待っていたと言わんばかりに俺たちのもとへ駆け寄ってきて、ことの顛末を聞きにきた。大体の内容をポルクに説明すると、ポルクは納得の意を表し、お礼として宿に泊めてもらえることになった（ポルク曰く、自分とマルクが貯めたお小遣いで宿代を支払ったらしい）。

そして翌日、ゼシカさんが屋敷に戻ったとの話を聞いたため、俺たちはすぐに会いに行こうとしたんだけど……。

『ごめん！私は適当に村を散歩してるから二人だけで行ってきた！それじゃ！』

と、こんな感じで何故かシシリーが屋敷に行きたがらなかったため、仕方なく俺とヤングスだけでいく事になったんだ。……シシリーってたまにあんな感じになるよな……。

「さて……ゼシカさんはどこ……って……ん？　なんか〃言い合い〃みたいな声が聞こえてこないか？」

「そうですがね？　なんかあったんですが……か？」

屋敷の階段を登りながら、そんなことを話していると、二階の居間に何やら険悪そうな雰囲気を感じ出しているアローザさんと、ゼシカさんの二人が視界に入った。……多分だけど、さつきから聞こえる言い合いはあの二人がしている事だな……。

「お、おいおい君たち……今はあの二人は取り込み中だ……」

話なら後で………つて、シス………あの女性の方は一緒に
では無いのか？」

俺たちが対応に困っていたところに、昨日会ったシシリートの知り合
いの男性が声を掛けてきた。

「シシリーのことか？シシリーは村を回って来るつて。だから今はい
ないよ」

「シシリー………そ、そうか。ならばいいが………（で、殿
下………まさか仲間のこの二人にも正体を話していないのか？）」

何故か顔をひくつらせているが、気にしないでおこう。とにかく今
は話しかけるべきで無い時であれば、少し待つ事にしよう。そう決め
た俺たちは、遠目から二人を見つめる事にした。

「もう一度聞きます。ゼシカ、貴女には兄であるサーベルトの死を悼
む気持ちは無いのですか？」

「………またそれ？何度も言わせないでよ。悲しいに決まってる
でしょ!?ただ、家訓家訓って言ってる母さんとは気持ちの整理の付け
方が違うだけ。私は兄さんの仇を討つの！」

「仇を………討つですつて？ゼシカ！バカを言うのはいい加減に
しなさい!!貴女は女なのよ!?サーベルトだってそんなことを望んで
はいないはずよ!今は静かに先祖の教えに従って兄の死を悼みなさ
い!」

徐々にヒートアップしていく二人。遠目から見てるメイドさん達
はもはや震え上がっている始末だ。

「もう！いい加減にして欲しいのはこっちよっ！！先祖の教えだの家訓だのってそれが一体なんだっての!?!? どうせ信じやしないだろうけど、兄さんは私に言ったわ！『自分の信じた道を進め』ってね！だから私はどんなことがあっても絶対に兄さんの仇を討つわ！それが自分の 私が信じた道だから！」

「.」

アローザさんはゼシカさんの魂とも思える叫びと決意を聞かされ、何かを考えている様子だった。 やがて、ゆっくりと口を開いた。

「. わかったわ。そこまで言うなら好きなようにすればいいでしょう。 ただし、私は今から貴女をアルバート家の一族とは認めません。この家から出て行きなさい 」

「ええ、出て行きますとも。お母さんはここで気が済むまで思う存分引き籠もってればいいわよ」

ゼシカさんはそう吐き捨てると、ポルクとマルクが見張っている自分の部屋に入り、身支度を整え出てきた。さっきまでのお嬢様らしい服装では無く、身軽で動きやすい服装になっていたことから、出ていくことはどうやら本当のようだ。部屋を出た後、ポルクとマルクに何か言っていたが、遠かったため何を言っているかまではわからなかった。

「それじゃあ言われた通り出ていくわ！お世話になりました！ご機嫌よう！」

最後に一礼をして、ゼシカさんはその場を去っていった。
ゼシカさんって 塔で会った時から思ってたけど
結構怖いな

「全く……あの子は誰に似たのかしら？すぐに音をあげて戻って来るに決まってるわ……」

「あの……アローザさん……」

「……？あら……貴方たちは昨日の……」

話が終わったところを見計らって、俺たちはアローザさんに接触した。

「そう怒らないであげてください。ゼシカさんもサーベルトさんのためを思っ言っただけだと思いますので……」

「……これは私たち家族の……いえ、もう家族ではなかったわね。とにかくこれは私たちの問題です。貴方たちには関係は……？そういえば、あの方はどちらにいらっしやるのですか？」

「あの方……ですが……もしかして姉貴のことですか？」

「姉貴……かどうかはわかりませんが、貴方たちと一緒にいた女性の方です。今はどちらに？」

アローザさんは多分シシリーのことを言ってるんだろう。けど……どこかソワソワした感じになっているのは気のせいなのかな？

「シシリーなら今頃……村を散歩してるんじゃないですかね？」

「……………そうですか。できればその方を屋敷に……………いえ、呼び出すのは失礼ですね。私をその方のところまで案内してくださいませんか?」

「?別に構いませんけど……………」

なんでアローザさんがシシリーに会いたがってるのかは分からないけど、何か理由があるんだろう。そう割り振った俺たちは、アローザさんを連れ、屋敷の外に出た。

視点 システイア

「やっぱりこの村は落ち着く……………」

屋敷に二人を行かせた後、私は二人が来るまで適当に村の中を散歩していた。この村は所々に花が添えてあり、緑も豊富で静かなため空気が美味しく、澄んだ気持ちになるのがわかった。サザンビークにも緑はあるが、大きな国なため、人が多いからここまで住んだ気持ちにはなれなかった。

「サザンビークももちろん落ち着くけど……………ここはまた別の意味で落ち着く……………」

「シシリー!」

「姉貴ー!」

「ん？あ、やっと来た」

しばらく待っていると、ようやく二人が戻ってきた。……名
残惜しいけどそろそろ出発しないとね。

「シシリー。君に会いたって人がいるんだけど？」

「会いたい？誰が？」

「私ですよ……」

「……へ？」

明らかに二人では無い声が聞こえたと思ったら、エイトたちの背後
から……声の主であるアローザさんが出てきた。……
なんでこうなるの？私が屋敷に行かなかったのってラグサツトと
アローザさん
この人に会いたくなかったからなのに……。

「お久しぶりですね。ずいぶんと装いが違いますが……お忍び
で旅行中でしょうか？」

「ま、まあ……そんなところですよ。……エイト、ヤン
ガス。アローザさんは私に話があるみたいだから先に行つて準備し
てて。武器屋で何か買いたいものがあるんじゃないかなかった？」

「そうでがした！兄貴！アツシあの武器が欲しくてですね……」

「ヤ、ヤンガス！待ってっ！」

はしやぎながら武器屋のところへ走っていくヤンガスをエイトは

やれやれと言った様子で追いかけていった。

「随分と賑やかなお仲間ですね？」

「はは．．．．．でも、楽しいですよ？」

「そうですか．．．．．それにしても．．．．．やはり二年前とは雰囲気が違いますね？．．．．．システイア様」

「やっぱり気付いてましたか．．．．．すみませんね？録に挨拶もできないで．．．．．」

「いえいえとんでもございません！むしろ挨拶にいかなければいけなかったのは私どもの方です．．．．．申し訳ございません」

私が謝罪すると、アローザさんも慌てて謝罪して来る．．．．．
こう言うのもまた久しぶりって感じ。

「．．．．．それでアローザさん。ゼシカさんと何かありました？先ほど彼女を見かけたのですが、何やらものすごくお怒りの様子でしたので．．．．．」

「そ、それは．．．．．」

ゼシカさんのことについて触れると、途端に口籠ってしまうアローザさん。やっぱり何かあったな？．．．．．でも、これは二人の問題だし、私が口出しをしていい話じゃ無い．．．．．一つ言えるとすれば。

「お二人の間に何があったのかは知りません．．．．．ですが、サーベルトさんがすでに亡くなってしまった以上、家族は貴女たち二人し

かないんです。どんなことが起こっても二人は切っても切れない糸で結ばれた家族なんです。だから……せめて貴女だけでも、ゼシカさんの味方でいてあげて下さい。お願いします……」

「システィア様……」

今の私に言えるのはここまでだった。親のいない私が言うのもおこがましいことだとは思うけど、たった二人の家族が仲違いしているところなんて見たくなかったから……せめてもの助け舟だ。

「……システィア様がそう言うのであれば……分かりました。次に帰ってきたときにでも、もう一度話し合ってみたいと思います」

「ありがとうございます。では、私はこの辺で失礼しますね。……ご機嫌よう」

「ええ……どうかお気をつけて……」

アローザさんと話を終えた私は、エイトたちと合流するべくその場を後にした。

港町ポルトリンク

村を出る前にポルクから話を聞いたところ、どうやらゼシカさんは少し離れた港町、「ポルトリンク」に向かったらしい。どうにもそこから定期船が出ているらしく、それに乗って向こうの陸へ渡る魂胆のようだ。

私たちはとりあえずゼシカさんを追うべく、「ポルトリンク」へと歩みを進めた。ポルトリンクまでの道のりはかなり長く、魔物も多く出現して来たため、私たちの疲労は募るばかりだった。唯一良かったことといえば、近くに海があり、その浜辺で少しの間休憩できたということだけだ。浜辺で休むなんてことした事なかったから、王女らしからぬはしぎ方をしてしまったのは否めなかった……。

そんなこんなあつて、私たちは無事に「ポルトリンク」につくことが出来たのだった……。

「ここが港町【ポルトリンク】か……結構賑わっているんだね」

「定期船が出る頃だからだと思う。船に乗るっていう人はこの時間帯からぞろぞろくるって話だったみたいだし……」

ポルトリンクは思った以上に賑わっていた。……だけど、どうにも人々の表情が思わしくなさそうに見えた。不審に思った私は近くの人にそれとなく話を聞いてみることにしてみた。

「あの、何かあったんですか?」

「ん? ああ……なんでも船の進行路に“海の化け物”が出るって話ですよ? ……それで定期船が出せなくなっちゃってるらしいんだ。つたく、迷惑な話だ……」

「化け物……でがすか?」

「なるほどな……」

どうやらそれが原因で人々は騒いでるようだった。それは確かにいい迷惑だ。この定期船はこちらの大陸から向こうの大陸へとつなげる数少ない移動手段だ。それを海の化け物という訳もわからない魔物に邪魔されては人々の苛立ちも募るといふものだ。

とにかくもつと詳しく話を聞こうと、私たちは乗船場に向かうことにした。中に入ると、何やら女性と男が話し合うような声が聞こえて来た。何事だと思ってそちらに向かってみると、そこにいたのは船長と思わしき男に向かって怒鳴りつけているゼシカさんだった……。

「もうっ! いい加減に待てないわよ! いいからさっさと船を出してちょうだい! わたしは急いでるの!」

「いや……いくらゼシカお嬢様の命令でもそれは無理なんです……。何せ海には凶悪な海の化け物があるもんで……」

「だから、そんなのわたしが退治するって言ってるでしょっ!」

「いえいえ！そんなことさせたら後からアルバート家から何言われるか分からないんで……」

「ううう……話が通じない男ね……」

一向に話が進展しない状況にイライラを募らせているゼシカさんが私たちに気づくと、途端に表情が明るくなり、私たちのもとにやって来た。

「塔で会った人たちよね？村の中で待っててって言ったのに、どうして待ってくれなかったのよ？」

「そっちがアツシ達に気づかないで先に村を飛び出したんじゃないですか……」

ヤンガスが剥れたような顔をしながら言う。正直その通りなんだよね……。

「でも、今はいいわ。ちょっと来てもらえる？」

ゼシカさんはそれだけ言うと、再び船長の元へ戻って行った。とりあえず私たちもそれに続くことにし、船長の元に向かった。

「ねえ？要はわたしがその化け物と戦わなければいいってことでしょ？」

「へ？ま、まあ……そりやそうですか……」

「それなら安心して？その化け物の相手はこの人たちが相手をするか

ら。ね？それでいいでしょ？」

「ちよっ!?何勝手に……………」

ヤンガスが何か言おうとしたけど、それを私が手で制した。

「そりやまあ……………化け物を倒してくれるんであればこちらとしても願ったり叶ったりなんで……………」

「じゃあ決まりね！貴方達もそれでいいかしら？」

「……………俺は別に構わないけど、二人はどうする？」

「私もいいけど？」

「兄貴と姉貴がやるって言うんでしたらアツシも……………」

「ありがと。わたしも早いところあのドルマゲスって奴を追いかけたかったし、貴方達に会えて良かったわ。じゃあ、早速船を出してちようだい！」

「イエッサー!!」

話の流れ的に、私たちがその海の化け物の退治を受け持つことになったけど、その化け物がある限り、船が動かないのであればやるしか無かった。私とて王女だ。人々が困る姿を見たくはない。

そんなこんなで……………私たちは船に乗り込み、海の化け物のもとへ向かうのだった……………。

対決！オセアーノン！

「出たぞー！化け物だ!!」

船に揺られること数分、目的のその化け物はすぐに姿を現した。

「あゝゝつたく気に入らねえなゝゝ。毎度毎度このオセアーノン様の許可なくこの海を渡りやがってよゝゝ」

その化け物は大きな大王イカのような魔物で、赤いボディを持ち数多の触手を私たちの前にプラつかせていた。思った以上のデカさに、エイト達は呆気にとられていた。

「結構でかいな．．．．．」

「でもただなのでかいイカですがよ！怖くないでげす!!」

「何だどゝゝ!!言いやがったな人間！よゝしそこまで言うんならこの俺様の怖さつてもんをお前達に教えてやるぜゝゝ!!」

「来るよ！ゼシカさんは下がって！」

「え、ええ．．．．．」

ゼシカさんを下がらせた私たちはすぐさま臨戦態勢に入った。正直どんな攻撃をしてくるかわかったもんじやないから、どう攻撃していいかわかんなかった。

「まるこげになれゝ!!」

「なっ!? 火って………まずい！」

まさか海の魔物が火を吐いてくると思っていなかったのか、エイトもヤンガスも動けないでいた。あれをまともに食らえばかなりのダメージになることは間違いない。とつさにそう思った私は、呪文を唱えた。

「【ベギラマ】!!」

「何くく!? 俺様の炎を相殺したただとおく!!」

「そんなこと言ってる場合なの？ 【火炎斬り】！」

呪文で火炎を相殺した後、間髪置かずに攻撃に移った私にオセアーノンは反応できなかつたのか、私の攻撃をまともに食らった。

「ギャアーーーー!!!」

「シシリー悪い！助かった！」

「こっからはアツシ達も!!」

オセアーノンが隙を見せた隙に、エイトとヤンガスが一斉に攻撃に転じた。

「【ギラ】!!」 「蒼天魔斬!!」

「ウギャアアアくくくツ!!!」

エイト達の攻撃を何の防御もなしに盛大に食らったオセアーノン

は、体力の限界が来たのか、海の中へ沈んでいった。．．．．．ど
うやら勝ったみたいだね。

「よし！勝ったな！」

「うん。無事に勝てて良かった」

「．．．．．あの〜？」

私たちが勝利に喜んでいた時、突如海から聞こえてきた声に私たちは反応を示した。その声の主は、先ほど倒したばかりのオセアーノンだった。だが、先ほどと違って敵意はなく、喋り方もどこか温厚なように見えた。

「急に襲ったりしてすいません．．．．．。ですが．．．．．それ
もこれもあの海の上を渡って行ったあの道化師の仕業なんです
よ．．．．．」

「『道化師．．．．．』」

道化師という単語に一齐に反応する私たち。とりあえず話の続きを聞くことにした。

「人間のくせに生意気だなくと思つて睨んでやると逆に睨み返されま
してね？それ以来、奴に心も体も支配されてしまったんです
よ．．．．．。ですから、お詫びと言つては何ですが．．．．．
これを受け取ってください．．．．．」

「．．．．．これは？」

「【金のブレスレット】ね。身につけると防御力があるから持ってお

いたほうがいいよ?」

何でオセアーノンがこんな持ってるのかは気になるけど、そこは置いておこう。

「人々の皆さんにも迷惑をかけたけど、今後はもうこのようなことはしませんので、安心して船を出してくださいね。それじゃ皆さん。良い船旅をばく……………」

オセアーノンはそう言い残すと、静かに海の中に去っていった。本当はいい魔物なのかもしれないね……………そんな魔物に船を襲わせるなんて……………やっぱドルマゲスは許せないね……………。

「すごいじゃない!正直あまり期待してなかったからちよつとびつくりしたわ!」

「ひどいな……………」

「そつちから頼んだくせに……………」

「は……………」

地味に傷ついてる私たちを他所に、ゼシカさんは話続けた。

「そういえば自己紹介がまだだったわね。わたしはゼシカ・アルバート。あなたたちは?」

「俺はエイトだ。よろしく」

「アツシはこのエイトの兄貴とシシリーの姉貴の子分のヤングスですが」

「エイトにヤングスね？よろしく。それで……」

ゼシカさんが私の方を向く。私も自己紹介しないとね。

「ヤングスがさつき言ったけど、私はシシリー。よろしくゼシカさん」

「……」

「ゼシカさん？」

「あ、ごめんなさい。なんか貴女……どこかで見た覚えがあるのよね……」

「っ……き、気のせいじゃない？」

ゼシカさんは、私の正体に気付いてないのかもって思ってたけど、そんなこと無かったかも。今後も気をつけないと……。

「……そうかしらね？まあいいわ。とにかく、魔物を倒してくれてありがとう！これでドルマゲスを追えるわ！じゃあいろいろ準備もあるだろうし、一度港町に戻りましょう。わたし、船を戻すように言ってくるわね」

ゼシカさんは船長さんの元に向かおうと、船底への扉を開けようとした時、何か思い出したと言わんばかりに目を見開き、こちらに戻ってきた。

「ん？どうかした？」

「3人とも。そういえば塔での事、まだちゃんと謝ってなかったわね。だから今ここで言わせて！……！！」

「……！！」

ゼシカさんの何ともお嬢様らしからぬ謝罪を聞かされ、呆然とした私たち。そんな私たちを尻目にゼシカさんは今度こそ船長さんのもとに向かつていった。

「……随分と男つ気のある娘っ子でがすね……」

「面白いんだけどね……」

「確かに……」

私たちがそんなことを考えている間に、船は港町へと引き返していくのだった……。

船旅

ポルトリンクに戻ってきた私たちは、ある程度の準備をした後ゼシカさんが待つ船に戻ってきていた。

「準備はもう良いのかしら？それならそろそろ出発したいところなんだけど……その前に一ついいかしら？」

「「？」」

ゼシカさんのどこか真剣見を帯びた声に私たちも少し気を引き締めた。

「あなた達もドルマゲスを追ってるんでしょ？それなら、旅の目的も同じことなんだし……わたしをあなた達の仲間にしてくれなにかしら？こう見えてわたしって魔法使いの卵なのよ。きっと役に立つわよ？」

「仲間か……良いんじゃないかな？旅の仲間が増えるならこれほど心強いことはないし」

「私も良いと思う」

「お二人がそう言うのであれば……アツシも賛成でがす」

「ありがと。これからよろしくね！」

こうして、ゼシカさんが私たちの新たな仲間となった。旅は道連れって言葉はよく聞くけど、まさにこれだね。私たちはそのままゼシカさんとともに船へと乗り込み、改めて向こう岸へと渡るのだった

(トロデ王達のことを危うく忘れそうになったことは………気にしないでおこう)。

船が港を出た後、私はエイトやヤングス達とは離れ、一人甲板で海を眺めていた。海を眺めたこともあまりなかったから、こうして海を眺めているだけでも十分心が和む。だから私にとってはご褒美以外の何ものでもなかった。城の中にこもっていたんだから海を見れないのは至極当たり前のことなんだけどね(好きでこもってたわけじゃないけど………)

「一人で何してるの？」

「ん？ああ、ゼシカさん。いえ、ちよつと家を眺めていただけです」

そんな私のところにゼシカさんがやってきた。こうして二人で話すのは初めてかな？

「そうだったの。それよりも、そんなにかしこまった喋り方しなくて良いわよ？歳もあまり変わんないみたいだし、おんなじ女の子同士、仲良くしたいわ。わたしのこともゼシカで良いわ」

「………わかった。それでゼシカ？私に何か用？」

「用って言うか、少し貴女とも喋っておきたいと思ってるね？さっきエイトとヤングスとも話したんだけど、どうにも男どもの友情話見たいのはわたしにも理解できなくてね………」

「あはは．．．．．それは納得かも．．．．．」

ゼシカさんは多分だけど、私たちとヤングスの出会いを聞いたんだなど思った。ヤングスとはトロデーン城を出た先の橋であつたんだけど、その時金目のもんを出せとか恐喝してきてそれにトロデ王が激怒して挑発したんだけど．．．．．それが原因でヤングスにも火がついてしまったみたいで私たちに襲いかかってきたんだよね。それでその攻撃が私たちではなく、橋の方へむいてしまったが為に、橋が壊れ、ヤングスは絶体絶命の状態に陥ってしまったわけ。すでに橋を渡っていたトロデ王達は無視しようとしていたが、私とエイトは、さすがに見過ごせないとヤングスを引つ張り上げることにした。それで、命を助けられたとヤングスから深い深いお礼を言われ、そこからヤングスは私たちのお供ということの旅についてくるようになってたつて言うわけ．．．．．いまだに何でそうなたかは女の私には理解出来てなかった。

「シシリーはどうして旅に同行してるの？わたしたちと同じようにドルマゲスを追ってるから？」

「私は元々、旅をしていたの。それでその時にトロデ王のお城にたまたま訪れていてね？運良く助かった私は、旅のついでということでもトロデ王達に力を貸してるの」

「ふくん？貴女も苦勞してるのね．．．．．んん、でもやっぱり思うのよね？」

「？何が？」

「シシリーをどこかで見たことあるってこと。しかも村で．．．．．」

「・・・・・・・・」

し、しつこいな。確かに私はリーザス村には来たことあったけど、あの時はゼシカには会ってないはず。滞在時間も短かったしね・・・・・・・・。なのにゼシカは何で・・・・・・・・。

「あくやっぱり今はやめておきましょう？今は違うこと話しておきたいしー！」

「そ、そうね。そうしよっか」

結局その話はそれ以上進展せずに、別の話題へとシフトチェンジした。・・・・・・・・。正直助かった。

その後しばらくして、ようやく船は船着場に到着した。そこには船から輸送されてくる物資などがたくさん置かれていたりして一種の物置き場みたいになっていた。

「どうやらついたようじゃな。それじゃあわしとミーティアは先に外で待つておるからな」

トロデ王達は船がつくと同時に船着場の外へと出ていった。また騒がれても厄介だからね。賢明な判断だ。

「それで、ドルマゲスはどこに向かったのかしら？」

「わからないけど、近くにマイエラ修道院っていう場所があるみたいなんだ。とりあえずそこに行ってみて何か情報を掴もう」

「修道院か……」

「ん？どうかしたんでげすか姉貴？」

「何でもない」

私が少し苦い顔をしたのは単にあまり修道院のことを好いていなかったからだ。というのも、小さい頃にサザンビークの近くにある修道院に行った時に、私が無作動な振る舞いを見せてしまったことが原因ですごく怒られたっていう経験があるからなんだけどね……。それにその空気はどことなく固くて居心地が悪かったのは今でも鮮明に思い出せる。だから、その時からあまり私は修道院には近づかないようにしてたんだよね。

それでも行くしかないようなので、私は渋々了承することにした。軽く装備を整えた後、トロデ王達が待つ外へと私たちは向かうのだった……。